



何の種

曠野

曠者廣之東西を廣と云南北を長と云曠野ハ廣野の義全体支木集ヲ做しての撰集也して日本ノ地形を

もて号する如題あり支木集ハ亦名枝葉集あるを倅りて扁と冠をとりて支木とハ早さしあり。廣田廣瀬ニふ廣とハ字をつけ、此地ハ東西へ廣しと云へし枝葉則東西へ廣し故に曠地とハ題せり。○年注ある地ノ所合ハ冬ノ日春の日が一殊して別はまゝ置て古風のねとを放れり。

尾陽蓬左ササキ檀木堂主人荷今子集を編て名を

あはせといふゆゑよこの名あることを志すに何ゆゑよこの名ある

ることを志すはと案よりしておいて後々この名あることハ考ふまじ

よかゞりふりふりころころとちめしり予もるのよおといやるよ

この名あることハ考ふまじとせば郷ヲ旅寐としおろく

折ハ國の云控、あ川めて冬の日未の又冬の日といふ其日ハ

そぬ初ふといふ必を日ノ字を字頭集をあらわしたお續て春の日また世子が

やられたるや衣更る若やよいの古のルキ、柳橋の錦













ちかまる極端の火のうらまゑと云ふ

おしし子の口まぬらや時鳥

津嶋 李下

時鳥の声はかく一日は宵へるものあれはかくつくつくするおれん時鳥をききま  
時鳥の泣きをききぬ子心はおさい金をもてんもへし。買はおいあひおらん。固

流や先気のはく地切の時鳥 重五

時鳥の早い奴どもうつてうつかうしてなまここのひらういぬここのまらか  
あこのあぬぬ

任まきいともかきむむ地の廣き 柵風

此ひら地はまうつてどちのちをききまよして待つていふうらうらうらうら  
かききうらうら

ある人のもらうそきむきよと右々ぬハ

日まきいともかきむむ地の廣き 鼠彈

日まきいともかきむむ地の廣き 鼠彈  
いともかきむむ地の廣き 鼠彈

晴ちまる空の行やほまきい 廿落梧

晴ちまる空の行やほまきい 廿落梧  
日めて秋やうらひ秋鳥のまきいといまこたけいあひいといふうまら

虫を自まき、祐免るつや時鳥 一髪

虫を自まき、祐免るつや時鳥 一髪  
虫を自まき、祐免るつや時鳥 一髪

三まきいともかきむむ地の廣き 全

一声十ノ開こもを浮んうとありあま三まきはまきいともかきむむ地の廣き  
ハ三まきいともかきむむ地の廣き 全

淡くて

日まきいともかきむむ地の廣き 柵風

淡い時鳥の名所あれは夜ふゆまの時鳥をききまよして待つていふうらうらうらうら  
ハ三まきいともかきむむ地の廣き 全

七 杏雨

淡白して意長一柳待使ても聞ぬれさへありきとらふ余情あり

あふあふや今詠ききく時馬 傘下

あふあふやの五文字昔折る余のいし下しるものあり上五字言あふら力  
あり。余注金葉集(十)よまたて麻さめさうらひ時馬人のさそ所へかりし

くまかりや力かまき時馬 全

ものいふちあつしるさきおま一肩をさみぬるやうまゆへし力か  
まきつしる但力かまき時馬のさし

馬とさるまもあひし時馬 鈍可

馬とさるまより今よてさりかま中ま一着あつしるさきかたさ  
石中のまらるるま

た、有明の月を残りさるうれし

可このるまあきいし月 智月

後徳大寺左土匠の歌の心の時馬のあまうしるまのあつしるまを  
後徳大寺左土匠の歌の心の時馬のあまうしるまのあつしるまを

うつかうしるまあきいし月 李桃

時馬待まきいし月かしるまあきいし月あきいし月あきいし月あきいし月  
あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月

うつかうしるまあきいし月 市丸

秋夕上のりり中七のかりりて上下の五も同しそれとあへて目み出  
ししるはばまの標者の一しりあつしるまあきいし月あきいし月あきいし月  
あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月  
あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月あきいし月

月三十句

うるしと竹箬のうへゆく月夜詠 梅舌

うるしと竹箬のうへゆく月夜詠 梅舌 十三歳  
うるしと竹箬のうへゆく月夜詠 梅舌 十三歳

それかき月見る中の獨りか 湍水

それかき月見る中の獨りか 湍水  
それかき月見る中の獨りか 湍水

月ひとつとていさうりちの人も  
いさうの月を天下の人も我ものか  
いさうの月を天下の人も我ものか  
いさうの月を天下の人も我ものか

雨の月とていさうりちの人も  
我人

向まかりぬいさうあはれさして  
すもぬあしそこあはれさして

いさうりちの人もあはれさして  
昌珣

このかゝる月をいさうあはれさして  
津島

夜つらあつちの月をいさうあはれさして  
市柳

赤家のあつちの月をいさうあはれさして  
一髪

あつちの月をいさうあはれさして  
一髪

いさうの月をいさうあはれさして  
あつちの月をいさうあはれさして

只一掃の月の光  
長虹

峠まで現抱て月見  
任他

光りあふとき月をいさうあはれさして  
一ツ家やいさうあはれさして

一ツ家やいさうあはれさして  
亀洞

一ツ家やいさうあはれさして  
名月をいさうあはれさして

名月をいさうあはれさして  
裁人

名月をいさうあはれさして  
よひては心の風雅をつらあはれさして

名月やとくは十二の有りあり

文麟

一の月を十二あるものやうに化してあやをまわしつゝのまがらぬころは  
下五中にも記をそめて十二ありあり今昔の月を何の月を多きとしか全性を  
ふくめしるまうの年注古蓮曰ハ月十五日は顯に能納言十二廻中魚勝於此夕之  
好のまうや又續古今集天曆の御製ハ月こそよめる月あると今月のこよひの月  
は似る月こそよめし

名月やういはきいぬつゝ舟

昌石

ルもきうにれど湖上の名月を舟にすてしうちのらんより舟をつまきて余  
の月の水面よりつらもるんとこのうい権りて舟の具に固

名月やもるゝとあつゝ草の中

傘下

月見の漫興あり月がけのしりりまのうへにおるる玉のこころこころとてささうこ  
りてささまひあつゝまへ

名月や鞍のまへと犬のこゑ 二水

見ものもとえて人の月見式 野水

名月の秋の更なるはくきく靴のまへとよく原文のまへとんをさう

月を舟にすてしうちのらんより舟をつまきて余の月の水面よりつらもるんとこのうい権りて舟の具に固

名月の心ソをまよ

名月をえらるこころ  
のソをまよあ

むつりしと月をえらる日ハ火も焼し 廿荷分

ソの月も海を忘れてあはれ之 全

名月や海もおは山もんは 去来

名月や戸と下戸とのむつりし 胡及

名月ハありきとたは 林のふ 釣雪

十

名月の傾き安きそり少之林の内をあらうちうもしく傾くそりうもあらう  
宵のあそびに揺らさしむ月影 一髪  
月見に行かりし橋をたゞよひて見ればこよく月見の姿をうつくしくあり

十三夜

影ふくぬ多ふぬ程なる月夜が 杉風

九月十三日を八月十五夜とむらしてあらば月より少くして八月十五夜とす  
やけき月をえん又今宵としかる月をえて来たにたゞぬ程のあはれもつこい  
とあり○朱注十三夜に中右記云保延元年九月十三日今宵雲淨明之寛平法皇明  
月無双之由仰也と云中右記に中右記に中大臣藤原宗忠公の家説あり醒醐  
天皇の御時や又日建仁寺の三益和尚十三夜の詩の序文に此夜秋月のことハ  
延喜の時時ありと云

朔日

茅のよの月のかげもあし海の果 荷兮

今宵の月東方に在るとものうらな月影とすのうらな月影とすものかやあが  
ぬ海よりへあんとすしりあふり○朱注朔日の月のうらな天文志二日月朔東方

曰聃又謂之側匿万のそいあ方ノ聃をうつくしくともいひのうらな月影とす  
とありいなるかたき

二日

見らくも多しき月の夕が全全

二日の月のかすうらなをえんもまたあはれなりといひてたしあきとすしり四文  
字ましくと力をかけてあやしくあやふしき

三日

何事の見しそも似れ三日の月 芭蕉

古人 三日月の象のキよりのあふりて玉の釣又とすこる鏡もとすんりて  
て字いまんとし似もちのてすすのあふりたすはものあしとすの朱注敬高  
曰句瑞白月の三日生明の若杜詩に新月似磨鏡式に玉釣寧月初月若月等の  
名いあんとすもこれらに似たたり

四日

夕月夜あんとんくして若いんむ ト枝

土

月も三日四日さういふもさやうきささめだんさうありうら行燈のいりり月  
み對してまきつらひしうらみ消してありし見んとあり。年注新撰万葉み夕三  
里夜と書てユウツリユト訓す四日の月いそくらぬらうてまあ行燈之ききる  
や夕月日朝夕日まて月をつくと訓すあふいさるへし

五日

何日とも見さるあめかしの雪の月 伊豫 一泉

三日月八日月の中なるものすべしつりし十五日して満十五日して漸く  
欠る間にかしつてのころあふかたうら

六日

銀川見習ふ浪や月の光 同詩 露声

あすの七日とよころを得て見習ふ浪やとあやまらへしつりしより  
かの中七を眼として七つとせの月とあやまら

七日

能はともを照して帰る月夜 岐阜 一髪

七日の頃月漸くさゆさゆりぬかかつて道さへありちかくてよひのそ  
影してかへる川推のころあふら

雪二十句

大津まで

雪の目や船歌との歌の色 具い角

ゆをい雪見ふまおのりし雪しるされり雪のむきふ對して船歌の色  
まきを色まきとまきいそまの年注其前日註ハ非諧の源氏よりと是を一拾意として  
凡百番の内にて月まを詞年ちの雪は詠中各十とをあまうこのり多誰とあふ  
云やまらうをとおふしに口の里まで宗因やとれとハはまらうのあふいとしくれ  
とりまらうをまらしてその実をすてまら 又肌骨に入て侍れともこいひあへま詞  
まあうりしはま大空までふ園いむらとあふ

い十ゆも雪見よころふだや 芭蕉

支考曰老の月の雪見よまそりぬて杖ま履のみけあふれとつらふらふよ  
行へきあの上のまもにまその詞を残しあり。年注赤紫残ま云後よりや  
いと事あひんらとあふ。三家卿のいさしつらふらふこのりま  
すへきともあふえら坂

竹の雪落くよるあく若狂のふ 塵交  
雀の雪もちる木をかのうやとるふととしていそぎなきふんよこの雪落て  
あまさつとくさねのんしきいせんこころあ

かきまると雪のあるし只のし 加生京

見らるまの他まで大なるかきまるといふいふそのさま一糸の雪をまき山  
に降きてま自くやくをき山あこいまた雪もあくるあれと近き山まを  
きこちまああのことと雪もあまへかれこれおせい合をくるんまとい  
時候の記あるいといふおのころ

車道雪あまき冬のあしたび 小春加賀

かふる雪中あれとも車道の雪のまきハ樞むし不食より古語も懐い  
養生の術のをしつともちあひぬ

まつ雪をるるに都を洗る 裁人

かきまると雪のまつしきをきくはあつら下ころり初雪  
のあまやうあまをもちて初雪のつらみの海をいなるを取らうたといふま人を  
なとまらばそれの行いのまつらうまやふものあり  
まつ雪は戸明ぬるまの巻か 是幸

此初雪のうらまはよこの巻かハ方を明ぬまつらうといふあこまされつよ  
こいやくこまつちよ風流が自然とこもつてあつらう

もはかへのふぬも雪のつらび 松芳

もと雪ハ天涯よりふりてふぬだがあまもも流るものかへつらぬ  
たとへ政もあまの隅くして掃ちきりころやますれあぬ災もかふるも  
のあまはれ我邦先君のあまこととて政に重君のま言をすうあてまれとい  
うまをくあまのあまは言まうらうらうのさてつらふのつらひつ  
故のあるまじやあり

くまきねは物陰見たり雪の隈 二水

秋の雪のしきよあまあまあ

雪降てる庭もまつる雀うふ 鳧仙

衣れぬしきよあまあまあまあま雀のさかま場くめてやこまをもももあ

秋の雪あまきぬやうま 枝おらん 除風岐阜

秋枝の雪をつりく見らるまあ夜の雪のこめは枝をうあまてて雪ををあま  
ハあしこのまああつこのまんとかふるますまはしきいし風流をこめくる  
秋人の上  
ハ他人の秋のま注古今集まをうて見らるまあまはま枝もあつらま

名白襟 いろいろな産胎換骨の法をもて化さるる古松殿は格別あり

ゆきの日や川筋斗ねそくく 躰訂

雪の日郊外をあたふあつたさすの人の面影もあつて一糸のゆきも川すぢ斗  
見一まつあつてるルくきりあつ

初雪やおもて人のうらむをよこする人たしてまはよひをひきていふそふところ

初雪をあためて人のうらむをよこする人たしてまはよひをひきていふそふところ  
いふあつあつといふ人

雪の江乃大よももつ舟が 芳川

大舟はよもも物おれを雪見の尻流二扁の舟舟舟棹さへにんご安んごうねしとあつ

雪の朝かゝ鞋まくる赤高し 冬文

雪のルーキのたきもい業するものおれはそれをいふのけてまはつたのき喰のか  
ら鞋まくる市中のルーキをいひてあつる市中のかまひしきより郊外のゆきを  
あつめんよいとあつ

雪の多るねやんや雁馬のま戸 桂夕

余鳥寒子怖るくまともいさう雁馬の健るあつ尚其声のあややれしとねあつるあつ

ちかちかお流雪かゝる河津坂 荷合

河津坂とよむへきおあて言あつらう酒の基他りの坂まやあがん味坂とあつ  
物とえまうふるくきあへい勿論時節のよう今よりく侍る

しろ雪や先多る路通

初雪のおやしら雪は先多る路通を  
ましてそれよりいふ金性あつらう

しろ雪の長みり野水

雪は一糸よりあつものあつて長きおあつるつらつとあつたれはさふるあつや  
あつた外のものもあつるあつとあつるあつたつらつとあつ

ふみかけていくのあつも海の雪 芳川

雪の何日もふりつてあつたぬとまて海に雪のうらむゆきはあつるあつとその  
産大あつるあつとあつ



歳旦

二日もしぬかりハせし春花の春

芭蕉

朱注一書子骨より友の来て酒興も翁もほろ砕てつらき一故終寝静し春多て  
起さる体ハ分明ある是ハ多菴園未のさるる世にかりけりぬぬありさめて  
をしき一一年の始の曙をえとつしなるるよとせし二日とてもぬかりりき一春  
曙をえとやと二日とても一花の去りてこそあれと疑滞さるる人のほろを  
賞へし一三つての春はすし余はくくし一〇春多終よ二日ハとすへま  
りあれとも平目ふり二日月もとをとあり一書ハ二日びてむの中畧こト云  
〇秋多尔はハ又二日月も麻志ひて曙をえとつさんつやくぬかりりきたと詞  
を入りてゆりあり〇終さるるの主人の言まかくうかりと一初極けよよとと  
日しとまて人の言もかく伺ふのつやくをねらと伺りいと初極は執意の志を  
いひ日こりあはハ翁の花の去をまといひあはハ初もまをの言ひこりあはとす

多し人のあはむもつじ花の春

古梵

若あや凡千年のつらへ縄

風鈴軒

千年の鶴へつらへ縄とかけしつらへもつらへ若水の若のさあもすうりてこころハ  
千年のつらへ若あや凡千年のつらへ縄

松かきつ伊勢う家賢人の誰具角

年のうつらかりるまつけて世の感表を祝しつらへ古人の眼のつけあえ人  
一〇朱注伊勢の伊ハ東洞院に住て庭前ハ松ありそれを臺りてよめる古今  
集まこも川洲もあはぬ我翁の漆まかりうゆ物もそなるは

うぬり否連歌あはひあし春 又鱗

一者ハ元日の祝い者あれとも性ハツヤキもものあれハ一者歳旦の吉例  
のものありつらへ哥ハい合えよまはたまた連歌の道具もあはれ我もつかいの平  
話ハおひつらへもものありと〇朱注無味堂曰宗祇法師ハ貝とツつらももの  
形不都来ヨ一連歌の貝もあはれハ是をかん俳りの歌もあはれと式人よりい  
ハれハ云う故に一我翁ハ松浦ハ孫の月見の尻も孫りた片もといひて〇愚考  
魚因曰有茶蔬曰菽廣句曰允非穀而食物謂之菽

月雪のあはれも志し一川の雲 去来

世人只めては月雪のあはれを母にみちりけるるを隠しあはれりた我りまはせの俗を  
そあはれて月雪のあはれを母にみちりけるるを隠しあはれりた我りまはせの俗を

かやうなるあはれも年ふる拍ふ 一日

年注史記曰松柏為百木長身門樹為之松のりめて交年の所よりもてや  
すを柏のまみまかりて誰より与る人もありとソのりまありし莊子曰受於  
命天惟松柏也亦有冬夏者又王前公字說曰松柏為群木長故松從公猶公也柏從  
白猶伯也五雜俎曰松柏獨以春抽新葉既長而後葉黃荷又曰秦皇封松於太夫又曰  
漢武帝封柏於大將軍又曰唐武后封柏於太夫の年注よ

元朝や何とあること 道 櫻 路面

無味堂曰武物語云年のくれとちの女残をすきすり初春をあん待ころのハ櫻  
の後ほさくを待心地を道て。山家集云何とあるまあるぬと所日す  
るよかろみより神々山とあるある櫻の枝の何とある花あるまをちあつす  
きよこの古歌とありて花のまをいソとて花をあるさくらもあれハ櫻の  
待ころとありてひまて元朝の朝のま眼のあり。の年注よ

元日ハ明すましころかきみぶ 一加具 一笑

元日のまをあるルルを暮るく余性ありし海にめてこをいそんより加  
るぶを眼をつけ

園子梅の花も白ひか 大垣 如行

園子梅の花も白ひか 大垣 如行  
ふいふ社老より春の春 岐阜 廿路梧

四十ハ老のうつくしき時とソの影をて初老ハ四十あれハ三十ハ才の修  
へしまが四十よりあるねも老のよちりて初老のルルとて大和魂  
の本性ありし。の年注白氏文集曰忽因時節警年幾四十如今欠一年この一年を  
二年みとありてとちるあり

若あをこちかけて見よ雪の梅 亀洞

未いしとまきえぬ雪もち梅ハ若あを汲む井の坊てこの若あをけけしハ梅も  
若あきてとて梅もあかかて名ををきあくまきハ妙あり

伊勢浦やは本川体むりさのま 全

一ウのすうた神くく文もまきさし。の年注無味堂曰太神宮御造宮の杖又能  
州熊野よりいつのまに

つらあきの名をつけて 昌珀石

初春のものあれハ松もほく梅も初春へハ梅のこまき名を勝んとあり

去年の春ちいさかりしの芋頭 元廣

芋うららる眼をうらる観しころぬ妙あり

小掛子栗あやいらむまつのかと 舟泉

十六

蒼葉三山のさち海のさちかきるものあれ松のまける門をあそいあか  
とつふをわ棋子くりやと序をとりくろくや。續日本誌曰堅武天皇神皇二年  
播磨直漢より棋子の種をた帰る伊勢物語ま若の上まそりかきるをさ  
かしくくりの大さまで云ここの海をつむこり

年男千秋 舟泉

千秋の例の千秋万歳ありこれ初春のいそいものあれたりあれよあひ  
いそあふへいそあふへ一本あひいそあふへ

山けあふくら白まする宮電のふ 重五

我電の世のやうに帰らう白あふむむつりしれハ勝たねとも山けあを  
くくあふその中よ自あふら白り交りてああやうああああああああああ  
て

松まじり馬つるこいととこ 釣雪

上へまじり格別なものやまじりのまじりていなる松かきりの中へと  
ついで行くとよ我がまじりまも天をあしし命をまじり世の中ハ  
のあしし十かじりや強よ守録の奴まじりいれがあふものやとあふ

月花の初ハ花燈のあふり 全

年注一書子月花の娘よ年の娘月の娘日、娘を風流よりあふり花燈の本

あふり代り上りハ月花形さりあふりつへし四注ハ四書子表すの注は  
つりしきやあふりとあふりしきまじりまじり

連てまて子まじりまじり美歳楽 一井

万歳法師 三河万才 千秋万歳とも大和國窪田若尾の西村千秋万歳  
の庭よ来て鼓森をまじり千秋万歳ハソソソソの西村より出南都の西南三里  
あり城内西流あり窪田若尾屋是あり正月五日楚裡木造り初の日この  
東の作庭よまじりまじりあり但大和の外も有りや岷江入楚みえ甲  
まじり千秋万才ハソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソ  
して身境を頂りその因三十四番職人奇合あり又三河万才の唱歌ハ大江の  
定基の化ありソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソソ

くら白もをこちる神のつる 胡及

裏白も箇至も時ものこまをまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
初まじり神のつる

見おるえむこや新玉め年の海 長虹

一年のそよあのは梅のそよあのは梅のそよあのは梅のそよあのは梅の  
見おるえむこや新玉め年の海

夕物と起て鐘ふしはしく柳の 鼠弾

早春の朝記こと記す疾く記て二柳をふるむ時高のまゝくくらぬれ冬囲い  
ふら渡ふしを記すは花をもこさんとあ

さる姫やふりいの雨りのあぶん 鼠彈

安満つてふふるも中頃も悼姫とやうまうらう 悼のあふいさをさるをさほ  
とあやまのころよりこもさるをかしけあるのくま 悼姫と書てさをいめと  
かふあり古言材も卒のあふさをとあうさを誦も同じ規仲うしハサあをいめ  
あうへしといともさるの年注一書ふりいの雨の純の面りて被返るこる面あう  
三井寺柏壽あふみわけう其面さをを姫のあこのりつうあふんとりふ句こ  
一書ふりいの雨即ち見尋の名あうて他西こまこよき女のあふあやめあを  
まをいやうあそのあ

此の江あ

蓬萊葉や舟の匠のあふんをくら 湍水

佛よりおまあふまきまきの巻 くらめ

皇市國のそまをぞとさうていし今銘の神こまよまう今をてよこる女の化  
あうら大和こまのまのまのまものそ

おまあやまの月ハりのあふん 朴什

ておまあつふんと金巻をこめ

おまあつふんと金巻をこめ たる思ひかんたる物 冬文

正月の飾もの誰もの母もてそあふんあつしきものまあふんまあふん  
よせらあまのせんさてたつ物まあふんまあふんまあふんまあふんまあふん

正月の魚のあふんがしらやあふん 傘下

正月の飾をむくあまあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん  
しきをすあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 冬松

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 榊風

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 柊風

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 柊風

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 柊風

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 柊風

あふんのあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん 柊風

大福や三日まちよと書福録  
十八

防川

とせしよその事跡孫の愁よかたりて服をうらりて三衣ありと初や是服と  
服の音あふしきうゆへの俗忌こ又村上天皇六波羅密寺の殿立の告ありてらの  
仏へ供する茶を服し玉出ゆ服平念ありし王服と稱し正月元日当寺の真茶  
を召さるし難詰抄あへし

首の長つたまのま 年をとこ 大山 昌勝

年男ハ早旦ニ若水を汲ものあれ昔の夢さす来しと下知しる之の参りある之固  
傘子と連なれりし 恵方棚 夕道

恵方棚はゆきかたりし歯を今ままきる一化あり  
袖すりて松の毛ふちきる之の春 梅舌

つるえむを喉のかる大かみ 野水

霞のかかりし地近のそまきを大隈をまてえいしあばんたそらんをあり  
曙と春の初やたふくら 左  
句佛日秋句こ二も解しかみし一巨腐花ふとの説もあるよとあれと初ふくらハ

初ふくらりて福川もさ常調の先まつくらものやうもあしあふり  
秋ハ解しえかきし解さぬりし志しと解し俗忌こと古人の説とありとせ

ちの春のめてこきりあ 賢魚、 越人

初をいともむり膳男のよめあれはめてこきりあ  
よむへしあめあし声の年注賢魚カワホト、カワホト、カワホト、カワホト、カワホト  
云鯉鮒ハ毎年夏に至て西海より東海にまゐる伊豆相模安房の浦に鈴上り伴の鯉  
ハ勝負子かつとをもととせや一常とま交し諸侍戦坊州山の初すかふりか  
つを成さると用いしあり

初るるは 演名之橋の入りま 全

演名のもしとええて久しとれをも初免のうしとむりし初く演名之橋を  
ありしとえとるとし初免を統くともこ年注ハ猿まより歌奴見を東海之演名  
のそしとあつらふりし元慶八年演名之橋を造る長さ五十一丈又正鑑抄云  
遠江國猪鼻湖より小瀬湖と結との石をわたりしを演名之橋と云ふ  
ハ寺川禰禪師左海右湖同一碧と仰るるを山より螺の出てそこふい湖とさふ  
か入海に放てしはき江ハ右のここととてたのここハ絶て久し演名之橋を  
初免と見しこととさめてハ疎のこもあまなとてハ橋を造りしを  
しとては初免或は女席のまじ守のあまな人をかくしいてありし初又同  
官人をかくしいては初免とてしとてハそらるこ免とては初免とては初免と  
十九



ありそのあつたはは月よりそあつてしう

女出て鶴とあとの若草は

加賀天

小春

側濡て袂のおもき 藤葉か

藤蘿

吾うらものこしとあけぬ若草

岐阜

素秋

石釣つ日月こる梅おしる

玄察

雁居ておしもかし 梅の花

鴻歩

梅の花ものきみいぬル

裁人

萩の志れもしりば 梅の花

落梧

梅おとあし見ぬ花 梅の花

一髮

花をぬき梅のすいそ 梅の花

冬松

みのむしと老れつる梅のちか

蕉竹

細代民部の息なま

兼注油風館弘氏  
細代民部とす

梅のあよなるやちあ梅の花

芭蕉

梅の清く香はしきよちして父賢あはりしよもまたあはりしよ心も梅のあよ  
あるし雲しいるあしよの兼注師兼二山つれあしき山り志あしよひげやと

り木の枝かりすらん 妹古歌より ちふあふへし 寄り木 外の木の生する  
息と子息息の号して 實のあふり 人生所以 注何木一幹 而分得 気異息故 注  
章離母の氣あり 故に子息息と云ふなり

首の鳴きこゝろ 風のか 若風

首の鳴きこゝろ 指さすおぼしおぼし 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首の鳴きこゝろ 指さすおぼしおぼし 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ

片ふるもと 西のけいふいふ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
こゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ

あけぬのや 首のなると ねの瓶 一桐

画も乃ひかぬ 其決りて 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
あけぬのや 首のなると ねの瓶 一桐

首のちい 首のなると ねの瓶 一桐

此歌のちい 首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

こゝろ 首のなると ねの瓶 一桐

新を友のあひし 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
こゝろ 首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

水汲こゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

松の見える 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

行人の竹まき 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

こゝろ 首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

新を友のあひし 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
こゝろ 首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

水汲こゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

松の見える 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐

行人の竹まき 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ 此のこゝろ  
首のなると ねの瓶 一桐

首のなると ねの瓶 一桐





て竹の筒に入ぬしを... 〇年におせらるゝに理處...  
〇年におせらるゝに理處...  
〇年におせらるゝに理處...

まのつゆか... 鼠彈

春雨のつゆか... 鼠彈...  
春雨のつゆか... 鼠彈...  
春雨のつゆか... 鼠彈...

白尾鷹

まのつゆか... 野水

まのつゆか... 野水...  
まのつゆか... 野水...  
まのつゆか... 野水...

物の井... 寄生

若のつゆか... 寄生...  
若のつゆか... 寄生...  
若のつゆか... 寄生...

立のつゆか... 亀助

立のつゆか... 亀助...  
立のつゆか... 亀助...  
立のつゆか... 亀助...

すのつゆか... 舟泉

すのつゆか... 舟泉...  
すのつゆか... 舟泉...  
すのつゆか... 舟泉...

すのつゆか... 其角

すのつゆか... 其角...  
すのつゆか... 其角...  
すのつゆか... 其角...

すのつゆか... 蕉竹堂

すのつゆか... 蕉竹堂...  
すのつゆか... 蕉竹堂...  
すのつゆか... 蕉竹堂...

草木の性直あれとも土地のようてかくの如し人も教りたゆじも  
土橋やあつるまへに土筆 塘牛

川舟やあつるのつむ土筆 冬文

土筆 頭巾のつむり 音江

蘭亭の主人 池子橋をたぎりしハ筆言あつる

池子橋のつむり 柳陰 素堂

遠く義之のあつるを志し巴山の鉦を嘆しと橋りあつる柳の風もあつるの  
理をありんとあつる池を橋と柳とあり今をよひ〇年注蘭亭の主人ハ王羲之あり  
晋の人字は逸才右將軍に至る永和九年三月三日四十三人會稽山陰の蘭亭亭に  
會す晋書列傳を略文して云又をよくし又隸書をよくし又草書を妙を得し  
ハ草聖とよふ性橋をきす今註孤居をたてて一橋を巻ふよと鳴く是を  
んるを求るよ来し得たつりは親友を携りて書を會すは義之のこころを聞て

もつて是をまつ義之歎懐をいともかつるは又山陰に一道士あり好橋をまねた  
義之行て是を見るよ其の甚しきは是を愛しんるをもとむる士曰我若し道徳を  
を定してあつるは残らぬは終るへしと義之歎懐として字を早則りの橋をたぎり  
して帰る甚もてあつるは終るへしと義之歎懐として字を早則りの橋をたぎり  
池水悉く黒く人をしと是は終るへしと義之歎懐として字を早則りの橋をたぎり  
是をもつてあつるは終るへしと義之歎懐として字を早則りの橋をたぎり  
あつるの下に日誌を神功皇后より以前は文書付くは應仁天皇の御宇に  
使を新羅に遣はし又人を招きよあつるは又河海抄に曰今の世の人ハ柳陰の法  
始ては以前のあつるは日誌万葉の歌のヤの如くは日本誌の書をたぎり  
万葉集の音と義と訓とをわけて書するもの之又簾中抄に云四十七の本紙の  
も之上に二文字ハ護余のを仙り下三十文字宣旨これに仙の京の一文を  
け為しを助くは又片うあつるは又宣旨の内より別りたりと云れを  
つくは

風のつ方を後ろの 柳成 野水

何事もあつるは柳のふ 教人

さし柳のつむりもあつるは 一矢

柳は老いぬて花もあつたかおのりきよ又東下りて老たさく斗り西のい  
るちういりちうぬと又あつたもともあつたまを枯らさむ

尺もかゝるや角さみぬる柳は 小春

柳の巾着をみすくさくさくも性あぬ尺さうりさあぬとや志んあひんんん  
うあつたあつた横ハタのこちう固

すさく柳はまじりつらむ 一哭

風、柳をささあいまさうのさあつたさうあつて柳はまじりつらむ  
て新しうさうのすさくあつたりとさうはさう通すえするささう

さうつらて夜をささくやあまふ 昌和石

かゝかぬさあつたさうつらてさあぬさあつたさあ

さあつたさあつたさあつたさあつたさあ 杏雨

柳のさあつたさあつたさあつたさあ

みさうさあつたさあつたさあ 此橋

不才天年をささくさあつたさあつたさあつたさあつたさあ  
ありさあつたさあつたさあつたさあ

吹風よ年の日まむく柳は 杏雨

柳の年よさあつたさあつたさあつたさあ

吹つたさあつたさあつたさあ 松芳

雀のさあつたさあつたさあつたさあつたさあつたさあ  
老子のさあつたさあつたさあつたさあ

うさあつたさあつたさあつたさあ 校遊

さあつたさあつたさあつたさあ

さあつたさあつたさあつたさあ 荷兮

柳のさあつたさあつたさあつたさあつたさあつたさあ  
のくさあつたさあつたさあつたさあ

蝙蝠さあつたさあつたさあ 全

月さあつたさあつたさあつたさあつたさあつたさあ  
のさあつたさあつたさあつたさあ

春柳さあつたさあつたさあ 素秋

車の上よゆさりと志これのしんさく  
此の柳と昔は車もいんらんしきか  
岸のやまきよもりけりしよちねん  
ころろろろろろろろろろろろ

三つきの後ころろ柳ころろ  
生林

兼の名り名れいもも植るん  
兼のちつろしきんあなれいもも植るん  
ちつろしきんあなれいもも植るん

仲春

麦のそよよ菜の花のそよよ  
不悔

仲春のそよよ菜の花のそよよ  
仲春の外れれりしきんあなれいもも植るん

菜の花や柳菜のまよのあいじ  
長虹

菜の花の色きんあなれいもも植るん  
菜の花のそよよ菜の花のそよよ

菜の花のこころのそよよ菜の花のそよよ

ふの花の畦うちつれあつた  
清洞

ついで春養生のちやれいもも植るん  
とつろしきんあなれいもも植るん

こころともんえそ畑お茶屋  
去来

春野をそよよ菜の花のそよよ

三つきの後ころろ柳ころろ  
昌碧

三河あつたのそよよ菜の花のそよよ

ついで春養生のちやれいもも植るん  
越人

さくらん人のそよよ菜の花のそよよ

唐なよ一本柳ころろ  
笑州

此夜よよの夜ありいづら寝ても目よりあつまじくぬとさすう花生のやくら  
あれは只一かたをなめらあまらやうとやとまら

とまらしくは裏千七くらつ笑みくら

除風

巽をかけく物千さをうねましくくつりく極のあも時うりあれは除風  
秋もをさしぬさくらうまぶ花陰ぬうちい何ともかひりあんこの人うとくそ  
おらうくくく

玉のくくはるるを橋式 一橋

紅顔人子勝まゆのい餘命をく古人のくくくくくくくくくくくくくくくく  
才いものをもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

うらうらうらうらうらうらうら 冬松

すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 一髪

時を失つらうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
もあくすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

とる風うらうらうらうらうら 野水

カミのあふり御徳をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
秋風よつやのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふのまはるくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 除風

秋もあつらうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
中雀一様子のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 一雪

行かきり御徳解くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 塩車

句者、秋心を奉るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 宗鑑

朱注一書に女院の御車の前までこの夜こと去らうり秋集の標者時をくくくくくく  
前書をのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まらぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

鳴きこくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 落梧

發ししけふれとよと静のあやをわかしとこれのれぬ静のあはれかしけり後くや

あつたをよとてしつゝのあはれをり 越人

我をよとてしつゝのあはれをり 越人のあはれをり 越人のあはれをり

いすのあはれをり 去来

花入る若し水行く蛙は 落梧

不図それてほろろを蛙は 書下

申ふたのあはれをり 一井

夕やしのあはれをり 柳風

哭つて思ふ人のいふことありきあはれをり 梅餌

椽木のあはれをり 炊玉

次上のあはれをり 百歳

かぬせきをいふことありきあはれをり

首春春

何のあはれをり 志和

あはれをり 春兮

あはれをり 野水

其情のもやうありしういしういし

舟をかり日のたの川のすゑに  
舟泉

木立森として春のついで日なたの影もほろもほのじかりのしんぼくま  
なべてすまねのなきそとていあふし

草むして童遊ゆた音の  
鷗歩

牧童のこもぬれまののちをひまふ

行蝶のとほり残さぬあたまの  
燭遊

豊乳とては味のあまみやまきこころのすこころるやうあり

麦畑の人見る春の塘のふ  
杜園

春日の眺をえ塘頭のしききの雪まきい麦畑へ入るも心あふさくまほ

とけ山や朧の月のすく  
式之

明月夜に影をえけ山のかまはれを附くころをかくれいふあり

ほろくと山吹ちるる瀧の音  
芭蕉

岸の山吹川に映してをえあふすは瀧の玉おの砕くるきき山吹ちるるうい玉

へるあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆみのききやくはを物山吹  
りちりあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆみのききやくはを物山吹  
と書あり新古今の川本の山吹吹くみんづのせくらちりやちりのをえあふぐく  
ま堂白より川の川のさしてあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆ  
新古今の歌いとし書に山吹吹くみんづのせくらちりやちりのをえあふぐく  
書しこの方をえいあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆみの  
ちりあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆみのききやくはを物山吹

松明と山吹のそく  
野水

夕まがくれいふあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆみのききやくはを物山吹

山吹とてふとまきぬぬあふぐく  
ト枝

山吹のちると蜂のまのこころも疑のこころもあゆみのききやくはを物山吹  
りちりあふぐくふけりいおのこころも疑のこころもあゆみのききやくはを物山吹

一重りと山吹のそく  
襟雪

徐々としる夕陽の吟行ある人

とけ山吹のそく  
葎雨



あそぶもゆくもあそぶ燕か 去来

去年の草の土ぬき直流つもめか 俊似

いままあこしつめをかりの燕か 長之

燕の留歩を現行すもめか 長虹

黄氏のみたてふさくゆる燕か 鼠弾

友減て啼きかひさやよるの唇 且昔葉

角落てやすもるゆの燕か 蕉竹立

夕まかぬらみふ

あそぶ清き親もふ浦の汐干か 裁人

あやも子も同じ飲まや桃の酒 傘下

人霞をのみと降との埴干か 友重

山まゆよん花候うめつしか 荷兮

山まゆ川山の眉よてあやうき辰の側ありたりて花さきぬのうと化ぬり結油の  
こころあめは男あへし。未注山まゆ野登て書く漢の先帝の時野登野  
藤波を多れはこれをもて紫ヲ用申信哉。山民常ヲ織あして着甲は産て結油  
と。よ結油。唐物之帛水神の母もものあこりいてお返の人の思ひて着る  
こととまむむつよまこ。平結よ上信也。

膨あやあつてあらしき花の花 兼正

鉄板の巻の花音とぬとつらあをき



過し重おやうりくあしあしこあまのうくたとして裁人々よの香をきこま  
 しし合和のたの香をきこま又あしあしこの香の鉄のあし山と  
 年より以重の香をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と  
 さあまのあしこの香をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と  
 人あり連歌の塚流の一流をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と  
 あり常三老として香酒著しあしあしこの香の鉄のあし山と  
 四月卒す夏籠とすあしあしこの香の鉄のあし山と  
 るへしこの香をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と  
 ねあまへしこの香をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と

山流りて

あつまきよのこりて 芭蕉

必えにまぐれに余の竹本にしりしめをいりりあしあしこの香の鉄のあし山と  
 こもへるうろくし十年注枝あしあしこの香の鉄のあし山と  
 つまふのあしあしこの香の鉄のあし山と  
 ちりさきさきあしあしこの香の鉄のあし山と  
 りかも目らの香をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と  
 峯さきあしあしこの香の鉄のあし山と

いとまのいさをとてあはれん 杜若 一井

杜若のやさき花のすくすくあはれん一八ははてはけりあしあしこの香の鉄のあし山と  
 しといひて廿杜若うろくしりしめをいりりあしあしこの香の鉄のあし山と

木の木のいりてあしあしこの香の鉄のあし山と 越人

木の木のわのわあしあしこの香の鉄のあし山と  
 くもあしあしこの香の鉄のあし山と

切株のころあしあしこの香の鉄のあし山と 不交

花のよき花のよきあしあしこの香の鉄のあし山と  
 おもひかたけ又花をきこまあしあしこの香の鉄のあし山と

若もあはれすくすくあはれん 藤蘿

花のよき花のよきあしあしこの香の鉄のあし山と  
 とまのよき花のよきあしあしこの香の鉄のあし山と

わちもあはれその木に 亀洞

花のよき花のよきあしあしこの香の鉄のあし山と  
 ナらりあはれその木に誰あしあしこの香の鉄のあし山と

いづれと若きものあり 竹洞  
若き若きものあり 竹洞

仲あひして若きものあり 鉦可

空穏にして暖風を感し若きものあり 鉦可  
衣裳をふるふものあり 鉦可  
夏の道ひのあり 鉦可

とけし山や下行の 海印木 夏々

山いもと山木の生へるものあり 海印木  
あるはあふれり花のあり 海印木  
さいか壮多たして老の境のものあり 海印木

上々およりの種とて 麦一穂 玄寮

上げ出い土を履きしものあり 麦一穂  
おのれはしとてめりしものあり 麦一穂

枯色り麦もあつる夏の 生林

夏日万中繁茂する中麦もあつる 生林  
こまに夏地のやうな中麦もあつる 生林  
こまに夏地のやうな中麦もあつる 生林

麦かして葉の本もあつる 他者不知

むき糸よ若きものあり 甲の養うふ 鉦可

養ひ人の老を感するものあり 甲の養うふ  
とて養ひ人の老を感するものあり 甲の養うふ  
人もまた老を感するものあり 甲の養うふ

若き若きものあり 嵐蘭

ルいひつるものあり 嵐蘭  
色あきまの城の景色をみるものあり 嵐蘭

鳥を飛とあふるものあり 落梧

鳥を飛とあふるものあり 落梧  
鳥を飛とあふるものあり 落梧  
鳥を飛とあふるものあり 落梧

人いふてあふるものあり 李桃







翁の句をあるし翁の賜を名とてこの夕を重流りしてさやと上五を同しよおき  
 みの家の奥にぬききこのふせて前書に同じ如きことありてもよゆく感ふし  
 貞室の句を種りしてとらいつのあり無味なるんやうその未注ありてるるめ  
 りやうて抄の口より魚をよめさて舟を舟ありて多きまをえぬハかりのちきり  
 いもやうをてかむし其事をえりよ生としつちものハつれ余のをしかり  
 十ふんと種ありぬ魚のくふしをちかむぬあへしその仁性かやう  
 へし智度論曰一切室中余為第一諸罪中殺生罪が第一式書に古しへ又秋風  
 を引て歡樂極る兮哀傷多しとつお浮世のさ下のあの子習りと観一むあはと云  
 乃貞室の句を種りして伴むる本依ぬハつちのあかりつうふ

おふしく

鴉のうらみ舟にのりて憐れあり 荷今

荷今翁の句を得て詠をうはた抄のすうくをこまきとてあへん私書古の画一と  
 とこらうかむるハあはれ

同

夢あはれも鮎も鳴るも鴉の舟 故人

上五とて又人を浮りしむせて注しむれとも別なゆき

先あはれの新とかりぬ鴉の舟 大津 淳見

親子一緒に殺生を業としてたてあういひのたさうらよかぬは業あぬハおの  
 つりう放逸邪見も子もそあつて先父のつつけをそへしとら世はりの  
 業あぬハやむいそを浮りぬとも同しく可悪き業をしてせり道しとあ

曲江よ竹舟の見えぬふゆき 梅餅

夕の表ハ曲江あぬハうふねの舟やうぬし書を伝してさハ曲江の鴉の舟の  
 邪曲もつりて舟の火ハたきあうら船の眼くらまてま如の月ありてんま

鴨の巢のそえたりあるがくきんり 路通

鴨ハ水中を巢をせぬ世の中の浮沈をたてて人のよと又かくぬしと観する

松竹の孫を見しうらまゆき 卜枝

夏野は草といもに松竹をこころしてつらうて新しきとをこころ

虹の根をかくれ地中の標は 鉞可

野牛の標の柱もあけりしとをこころしてつらうて新しきとをこころ

薊の花や流子よこる宵の雨 左



苗ハ丈サキヨクヨクして流をくくへかゝるも雪のふりすまきまきまき見をんぬ  
苗の花もやして流のかゝるぬすこを流せりあつこ

梅もや時給かゝくもさうむじん 或人

梅子ハ可き花もぬものもさうさうつとてま真さうつしてあゝいさる  
けそのくをさうさうむもさうさうさう前給もしかさうねもまま給さうさうおも  
しるし只の画さうさういかに

冷しや灯のこころ夏の日 藤蘿

夏の朝のあまうなりぬいさよその中し残りこり灯すきましくさゆさうさこの  
懶惰をさうつてすまきまきさうさう

夏の夜やあまゆのさくら中室 且葭

夏の夕きさ霧をもち灯すゆすすしくもゆしくもさうさう  
人の菴を話ぬハあゝさうさうさうさう  
ちりりさうさう

すいつハすいすいすいすい夏の山吹 具角

すいつの炭極うて夏の金用の喻あり夏の井ロリの書きりの注を名抄し火  
おこさぬ夏のすいつの心地して人もすまきまきすまきまきのさよとよめる十三

の女子のこれを書いて冬のすいつこそ火のあまき今おしすまきまきと  
る又法り納言すまきまきも夏のすいつを一番して秋のあつこき  
をもて一々のさうさうさう

夕白の秋の風の 飄うふ 芭蕉

此夕を観すまき人さうさうさうさうさうハリヤしき垣をさうさうさうものと思  
いあゝさうさう秋の風さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
たりいさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
又秋おしは新給いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
かほもかゝる新給いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
あるいさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
秋ハは秋のあれハ之哉ハ未まを捨の抄りさうさうさうさうさうさうさうさう  
をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
又や卦の法ハ名所旧跡神祇教年月日人各二季合休これを名抄し十五道の  
句まハや卦やさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ゆさかぬの志白く人の志ぬあり 野水

夕白の花ハ夕白さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

夕白の蚊の鳴ぬそのくさうさう 借雪

夕鳥棚のかけの住みのいふさすの巻を好の巻のいふさすの巻

山路まて夕の白えいふさすの巻 津島 市柳

山路の人らあき火をたきまて地中ふいぬ夕鳥のいふさすの巻

名ハるちま夕の白えいふさすの巻 長虹

夕の白えいふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻

暮夏

楠も 動くやうく 蟬の七夜 昌碧

大樹をいふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻

雲のまて 腰のけし 野水

何れも天の詩をいふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻

夕まよふ 干金 ぬる 垣根 傘下

夕まよふ 干金 ぬる 垣根 傘下

すし 木陰 法印

ある人日得のまもやらぬとて 授と得えのゆあまて 阿行こ。ま注史本集

涼し 白雨 あり 入日影 去来

秋月のよもろいふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻

竹庵 涼し 岩のまて 荷兮

旅者の着あるいふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻

もよおの あり 日影 左

たのまきあふいふさすの巻いふさすの巻いふさすの巻

かとりたの 人よ 道々 夕す 如風



多しのうらみ

まて馬子のまきる清みづ 澄月

かのまきりしとくよ及ほほを想とりよけりあつきのゆえかこもあまき

馬のうへをわたりて金座をのりたこもあまき

浅黄の清くすしとる色あはれあつたをささる清みづもともとのんま

浅きかひのしほこも似合しとる

直坐の袖清きと結あし便あしねと赤座を脱びさへこもかひもき思さあはれ

直坐をぬくはみ結ふ法も亦一髪

往年の夏のかちちを懐きまよふたの程をこてつうおあせく

中干や首布とあるは桐の花 ト枝

麻の葉をたうてうねる中馬にちたぬきをさく葉のころうとあ

麻の露路比とるんう馬の海 鞍 李十辰

釣り鐘草後子竹ふる名もどし 裁人

錦の花たふく世蘭を似あふ花 素直

蘭の香を称して古へよりこれをソく錦の花こもあしねと考ふ世に似て

非ありものうたはと一君子を似いさ小人あり合持し似いさ山師ありかし

曠野集卷之四

初秋

ちるあや麻外あとの秋の風 越人

麻の葉はよく風をまよかいてそよくその麻を外へんか地畑ものこもあまき

悟のあやいさふらん秋の風 圓解

秋風の冷しく面をゆへぬるやへぬるうらむ桐の葉をかちうて風を辟えうとあ

松島山雲居の卒まで

一もあちの音のしるしもあはれに 仙花

此處外の地帯まで物さすへかき静に口にもものさぶのちの音のしるしもあはれに 仙花

初秋の新涼に斜陽の光のしるしもあはれに 秋の夕光も 方生

男くさすに羽織を白生の白向うふ 李雨

七夕を答ふる頃袖に秋羽織をかき上五のたりぬる 詞人情をあらわす

朝白の酒盛をぬきあがりて 芭蕉

酒もりに大加た度を超てくあやまちをきりぬかぬのるよ一寸のしるしもあはれに 芭蕉

暮や垣のまきぬきあがりて 文麟

朝かねのつるものかきぬきあがりて 文麟

あやしの白き露も見えぬこ 荷兮

子を守るもねいり詞の句もあはれに

朝かねをそのまよ なるふくしるし 荷兮

降 ある朝白のまきあがりて 鴨歩

あるまのあちの清きあち朝かねを我宿の赤まきあがりて 鴨歩

夕やあちの雨の夜の白きまきあがりて 鴨歩

夕やあちの雨の夜の白きまきあがりて 鴨歩



桐をつくりし時ハ...

草のしからぬは花... 任口

朱注草かりの... 西岸寺の住持あり

もえさくぬて... 荷兮

只ゆるあくつ... 宗祇法師の中

行人ヤ塚... 胡及

行人も志ぬ為の中... 素堂

名と志ぬ小首... 素堂

廣野の休草... 月まねつもの

を介化とし... 文のいれめをい

年々歳々花相似... 後似

仲秋

不ま乃あみ鳥... 芭蕉

注をまぐら... 素堂一山新流の

つくりと給... 小春

雁つさめ... 津島

石切の音も... 傘下

伐木下々あるをくしく類するさいしすすすす見さんとして深山あまを石切  
る音を聞く聞へたるあり

谷の音もあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
ト技

麻の音も人の歌る夕さふ 一髪

田と畑を獨りたのむ安き山もか 一泉

山賤々麻おる仙つて笑ひく 重五

酒の音もあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
具角

林間紅葉をわいて酒をあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
も自然の他にして供の奴の教をうけよと  
そこのもたつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
暖るま温の間をまてさつと幅幅の出るさいしすすすす

歎炭あり昔年降とリ小もの歎の形も炭を焼て木人形も酒籠をかへやと客の  
来しゆりけり人の歎炭うて人形をして酒をあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
云々又林間燦酒燦紅葉名々もあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
玉りんときさささふふ式夜地あつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
すすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす  
て薪をこそい志いりりんさを奉行の藏人忍入りてあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
古快気よお天をまいて酒を暖るま温の間をまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
りをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
いよ一人より下万民に至るやれ風推いあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす

老ぬ人ねいひてるぬぬぬ 東順

美しきお家をいえつたも地行もあれ旅もあれ思ひをうまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
ルしきいんじんういんじん又此もまたのルしきを同じく友とちと若子あつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
しとあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす  
つあつたまてさつと幅幅の出るさいしすすすす

花の中はお多ふしかきま枝が 林斧

とこまふ地もまふ鳥の衣も 裁水





うらハソのあれハガヨクしして表れふり、ふんとまろ

### 閑の素牛よあひして

十こそ砧孫六やもき、志津やもき、其角

年注孫六、閑孫六兼行又、兼元とソム志津、志津、即兼氏、うて、正宗の才  
多、大和の閑、うて、ま住して、世、名譽の刀工、さるを、今、砧、音子、代りて、世  
の、変移を、いじり、あり

### よし地多て

おぬねちちて我まきりせよ坊々毒 芭蕉

年注「ミロ」のく山の秋風さよふけて古さとさ、く衣あふり、世を、着、あ、し  
て、砧を、を、い、た、ら、た、ら、へ、し、坊々、の、伊、留、り、坊、あ、と、り、一、ろ、ま、い、と、し、く、し、神、を、入  
口、お、形、を、あ、ら、へ、て、旅、客、を、と、り、む、の、家、居、之、境、物、ゆ、を、あ、ら、ふ、茶、根、の、湯、え、し、似、た、ら  
今、兼、堂、白、杖、の、坊、ま、舎、り、て、坊、々、毒、を、毎、日、人、昔、湯、湯、の、江、の、ほ、と、り、う、て、楽、天  
を、あ、ら、う、む、る、い、商人、の、毒、の、あ、ら、へ、あ、ら、ぬ、や、今、坊、々、毒、の、砧、ハ、ソ、う、も、あ、り、て、氣、を、  
あ、く、さ、め、し、そ、や、と、も、あ、ら、ぬ、う、ま、い、し、か、れ、江、の、な、と、り、是、ハ、禁、り、坊、地、を、代、り  
と、も、ま、い、あ、ら、ぬ、一、書、ま、雅、道、の、た、さ、と、さ、く、衣、あ、り、古、道、も、あ、ら、ぬ、思、い、あ、ら、ぬ、て  
せ、り、古、道、と、あ、ら、ぬ、一、書、ま、雅、道、の、た、さ、と、さ、く、衣、あ、り、古、道、も、あ、ら、ぬ、思、い、あ、ら、ぬ、て

らハ旅旅のうさもすれんものをとりの風状、書子、おぬねちちと、い、さ、ひ、と、  
此、訓、俳、り、ソ、マ、チ、カ、レ、知、教、と、連、系、優、美、と、艶、あ、り、詞、つ、き、を、ま、す、と、  
故、マ、チ、ぬ、た、お、と、い、ち、衣、う、ち、と、い、す、々、知、字、正、鑑、抄、子、回、キ、又、イ、タ、知、名、衣、板、之、  
畧、し、て、き、ぬ、た、と、云、又、和、名、抄、子、日、礎、ハ、衣、を、お、る、之、又、砧、ハ、此、る、正、字、通、子、日、砧、持、繪、  
又、葉、砧、ハ、農、家、の、葉、を、お、る、之、と、い、は、れ、砧、ハ、ち、の、註、一、又、引、板、ハ、畧、し、て、ヒ、ダ、と、い、は、れ、  
ら、ハ、西、行、ハ、た、い、あ、ら、ぬ、大、東、の、里、と、い、は、れ、こ、こ、と、い、は、れ、道、是、ち、右、身、と、い、は、れ、  
又、引、の、字、口、字、日、を、と、り、あ、ら、ぬ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、  
す、マ、チ、オ、キ、夜、の、ル、キ、を、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、

### 暮秋

何となく桂、う、葉、の、白、さ、こ、う、ふ 芭蕉

おぬねちちて我まきりせよ坊々毒 芭蕉

年注「花の隠逸、あ、ら、ぬ、もの、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、  
い、な、さ、ん、し、と、あ、ら、ぬ、の、年、注、一、残、り、あ、ら、ぬ、ち、ち、を、め、て、た、き、桜、花、あ、ら、ぬ、て、常、果、の、う、け  
ま、い、振、り、日、を、あ、ら、ぬ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、と、い、は、れ、  
四十八

人めかしくしてあるいさうと

山道の集めゆくも又ちういさう

裁人

集めもと一様あれども處よりして性もあはれ人もさういぬよりして事もあはれども  
もふるよりよこし心もあはれとて但まの志けきめはつさくより山道の集り静りある  
すくあはれ集りいさうと

一色や他どぬ集の花ばかり

曉龍

集の花の性もあはれとて一色や他どぬ集の花ばかり

荷兮の室も旅ねも草花のありさとして

心拍もゆるゆると土まをうさくれとまじりて

うそふけのあまもてんぎや集の花 具角

集の花の性もあはれとて主人もとより信憑のそまぬ思ふて清白の道もあはれ  
いかもこのあはれい合きて集の花をつくはるへいさむやの見えたいうてんぎ  
たはれいほろそくしあはれんとてこの集注のまゝいんをそやとて教を吞てんぎとん  
とくいさうと集りあはれとて神心信りて白集酒に不祥を去り又集を花子入る  
時ハ月を明らうとす殊まり長壽を保つる名もあはれりて

集の雨露潤る人ヤ鬢帽子 具角

集帽子の婦人の鬢を濡れあものよして埃のやうなものであり続たるこの具角  
の句は白くもあはれい人ヤ鬢帽子とてあつ潤カミホムトよむ説文子羊ハ傷ナリ  
鬢帽子を着たるの上を濡れあはれいひりいすかよわけあはれいといさうと集の潤る  
もあはれりてことく白いやうなあはれいあてやうなえゆるあはれい

なみあつて集他もあはれい 二水

事前の定む時つまつたといさうと如く常の頼もあはれいをくやまはる万事は  
ことあつていさうとあはれい語路よく聲上玉りていさうと

あはれい集の集あはれい 千代

此の元集集と集りいさうとあはれい集の集あはれいいさうとあはれい集の集あはれい  
をやうつくとあはれい集の集あはれい

淋しい櫃の集あはれい 芦洲

秋の夜の長きよ集あはれい集の集あはれい集の集あはれい集の集あはれい集の集あはれい  
あはれい集の集あはれい集の集あはれい集の集あはれい集の集あはれい集の集あはれい

残るもあはれい 如生

うらもときのぬいふ雲のあついでをいとほしきこもしてはとみまはりのあついでをいとほしきこもして

芦の穂やまねくはむすちのそね

路通

若の穂のまねくはむすちのそねのあついでをいとほしきこもしてはとみまはりのあついでをいとほしきこもして

曠野集巻之五

初冬

あめつちのそねくはむすちの時あついで 湖春

冬は天地の嘶とら風の端書きは凡声は天地の語とあるよし

冬ある人よやつらひしむる ちるはまあるこ

一夜来て三井寺より初時雨 尚白

冬は曠野日三井寺の謠子よつともをとりつともといふあついでをいとほしきこもして

いへう〜詠りやとあついでをいとほしきこもして

あついでをいとほしきこもして 湍水

あついでをいとほしきこもして 湍水

美句の真行子

元ある逢ふ人のあついでをいとほしきこもして 荷分

あついでをいとほしきこもして 荷分

人を待つる日子

今朝のうらもかの見ゆらし 落梧

前書と巻とそめあついでをいとほしきこもして

釣かねの下降のこぼれくまき 炊玉  
時雨のあめのあまぬ胸をあまきを釣かねの下降のこぼれくまきめへ織つて来  
たる仙者の心のこぼれくまきあまきしとこへ

渡し守るが長急るくぬが 傘下

来る人不用きしとてあまきとくぬがくしてかくれぬとよきよへ

二日方のあちうあきりあぬこのこぼれくまきの風もあちうあぬとよきよへ  
はくしあきあちうあぬして実さあちうあぬしてあちうあぬへ  
月といひ吹ちると働きたるあちうあぬとよきよへ  
の月といひものまて仙きりその名目をのそけいせきとよきよへ

一毛あつ、掃の毛あまきよきよへ 一髪

三毛あまきよきよへ 俗語のまてくまき自由を得くちうあぬとよきよへ  
くまき皆あまきよきよへ 実妙々

このまてくまき 淋も 田炉裏に 同

有の俵あちうあぬとよきよへ かくれぬとよきよへ 何事とこぬ古人の誠より出た  
る白あぬとよきよへ 朱注敬佈日司馬温公詩話日魏野之詩と煖量炉中無宿火 讀  
書窓下有残灯

枇杷の花人のまきり 木陰に 同

時、初冬よりて人心とちあきかるとよきよへ 人のまきりとくぬとよきよへ 枇杷  
の花の時を得くちうあぬとよきよへ

茶の花もものつめよえなるが 李子晨

茶の花のあちうあぬとよきよへ 中七妙この序又次ハツイデうして古言拵まつ  
つてハ續連トツレハ物ハデ又キツイハ通入故みぬハ付字の誤あまきし

梨の花もものつめよえなるが 蹄水

初冬かちうあぬとよきよへ 花もものつめよえなるが

養中のつめよえなるが 花 昌珀石

帰り花をえんて其のつめよえなるが 花もものつめよえなるが  
り花を今とてあちうあぬとよきよへ 花もものつめよえなるが  
かちうあぬとよきよへ 花もものつめよえなるが

麦あまきよきよへ 奇藤あまきよきよへ 庵に 左





初氷りの鈴ルキマアの言外をえり

深き池氷のとき子規きり 俊似

命を知るもの巖墻のまじりた、たかくをうつしむま、  
後世のソワリものより雪泥あまへり

つきまらまの雪かやうる氷 除風

つきりつみ割りよめぬこのまの雪をばさるべきあり  
まを師もこの花にまよ入ぬをいさる初冬のふゆまを  
うる感しあうや 時候のありしむ

おあつてゆそりぬき氷柱氷 夜舟

氷柱ハ全く水晶のことくあれハ不潔ゆそりぬきを  
ぬもの観しあうや

兼題雪舟

峠より雪舟来りし 塔本池 鼠彈

熾山は塔本熊さん、ソつこもあうといひつら  
つりよええとたぬも、まもま行をゆつしあう

ぬつとらと雪舟来りし 荷分

富貴の家鬼このをうら、あうゆれ人のここと  
ハこころす人きまよこそ

たきこめて雪舟来りし 長虹

たきこめて雪舟来りし 長虹

馬屋より雪舟来りし 一井

こは薪あまをつむ雪舟あま、  
まを休んといふこころまを

雪舟にやは体も直まてぬる 篋洞

人情の報若下まのくら、まを

つけくこおる雪舟のまや結氷 合帖

世薪あまをつむ雪舟あま、  
つりよええとたぬも、まもま行をゆつしあう

雪舟にやは体も直まてぬる 忠知



冬の海つららしくあけりて色立あつて年注無味堂日土佐日記子日黒崎の  
松原を經て行ゆと子父の老い思くねの色青く輝の波り雪のこくとく夏よりうら  
覆折る似て五色の今一色をいぬる

玄風の寒き風情が上粟をせす

舟のたぐ火の土屋まゐる 徳のふ 亀洞

朝の鮮をえいもあるん な子馬 村俊

漫々たる海上を自在に遊ぶありやまを羨してかきあやをそふたうあ

井を堰るも其は六月寒く米つく男ハ冬裸なり

赤くむへきを若くむあき若くむへきを若くむあき若くむへきを若くむあき

汗出して谷の突こも氷室が 冬松

氷のつめあきものあきをこゆを困りんみ汗をいりてすうと一月のすうり  
理の何と理あふん老在の萬言をわらものあき

海田風揚の土屋埋めあき氷室が 利重

氷室の暖蒸の言あき冷言一偏あれハコノウメの言まは換りん書をわらして  
或もよめかきいぬる

炭竈の穴あきやうなるあり 亀洞

遠く見やうなる冬の日を念んあつて地をぬきも雪もあつて

膝のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

かゝ有の傍あつて一月のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

火のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

冬つとまきつあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

日都て花の蒼とて抄よりかきあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

冬つとまきつあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

こけて冬つとまきつあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

冬つとまきつあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

九旬この炬あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
侍共柱又源氏末炬子門をまきもこのまてハありそふき本をしらそむつ



曠野集卷之六

雜

くさくの題詠とあり

年中行事内十二句

供屠種白散

荷兮

いそあや屠そあえそむる人ひ芽

人改葬ハ人の改葬ニ七歳の女のまゝいよりあめをむくもそそかより長子及  
はをこも古例あはれゆきくのいともあはれきしとある。未注のそけあやハ幼  
ニイトケナシニ曲礼曰人生十年曰幼又本草小品方曰屠種此華陀之方也元日飲  
之辟疫癘一切不正之氣造法用白木柱心七枚五分防風一两葎蕪五枚烏頭二枚五  
分馬椒桔梗大黃五枚七分乾桑小豆十四枚右三角之以絳袋盛之除夜懸井底元日  
取出置酒中煎教沸家奉東向從少至長次第飲之出滓還投井中歲飲此水一世无病云

春日祭

とーこら子鳥居の夜つるんか

春日祭ハ二月申の日藤原氏の祖神の祭り多れハ鳥井の夜とよみて藤原氏の  
加ゆくと書してつるんかとよむハ一ハ注春日祭ハ清和天皇貞観元年  
二月九日始て行ハる二月申の日ニ春日大明神ハ称徳天皇神護景雲二年正月九  
日和州三笠山ニ垂跡ニ口年土月九日河造宮ト云く又曰春日ハ五根家の祖神ニ  
御神詠曰ハあはれくの南の岸の家階して今そそかえむ北の夜あはれ詞ハ花集  
ハ春白山北の夜あはれいよりさ一のゆへしとハかひてありまきハ又鳥居の出入  
ハ生死のこころして入時ハ内せむ付ハ外へしと云ハ雨雅曰鶏棲於ヤ為椹敷  
垣而棲為時又詩曰鶏棲於椹あはれハ鶏棲のまあるを花表と書ハ大さハ誤り  
ありとハや鶏棲ハ笠木と書本とハ間子梅と書とさハ略して鳥井と書来たきハ  
花表ハ誹詠の本造り方格別ナリ

石清水臨時祭

皆音も志つゝあやたさくらんか

大官人のゆいしき空を高くちるあり。○未注伊勢と石清水ハ二所の宗廟ニ欽明  
天皇三十一年豊前の國宇佐郡ニ鎮坐す其後清和天皇貞観元年八月廿三日今の  
甲山子うつし春るとあり臨時祭の始りハ村上天皇天曆三年四月甲午の日平  
将門退治祈禱の爲ありと云ハ其後三月ニ改め玉ふ花鳥金時ニ曰臨時祭ハ柳  
頭使若舞人搦階徒山吹ト云ハ正風体抄子室家郷ハちりしと云ハ衣る多ハる世  
味の大さハ人のかきしと云ハハ

灌佛

糸の目やつりては洗ふ佛造

高僧傳曰四月八日浴佛以五香水灌頂又請法教曰管艾納都梁以上灌仏の三  
檀香と云兼和七年四月八日律師靜安清涼殿に於て始て行ふ又推古天皇九年  
始て灌仏會を行ふと云ふ

端午

おと寝て葵はるる松葉の湯

老のいづれもは伴つるものくるしきをわかれしはなまこよ未は競馬の文武  
天皇慶雲三年五月五日始りて云

施米

うち明てるをこゝろ未そ中皇代

ふをかくれぬるあふあふ一茶こころるる仁法のめりかあや一團うつとあまや  
そしとあふあふ

乞巧奠

わこの葉より七夕のそええよま

此夕星をまいてあふりりあふり但まう七葉の餘ふすしし佛の座をとりかて  
むりりしけこ秋の七葉こそ後と優まやさしりれとあうさて秋の七葉あれ七  
の葉の孫よりりして七葉まよりあふりり乞巧奠は唐の宮嬪七夕は蜘蛛を以て  
金匱の中は納き曉に開て蜘蛛の糸の稀密を祝して巧の多かを待たりとす酒館類書  
七夕は婦人糸繰をばい七孔針を穿ちて或は金銀鍔を以て針とす仙葉を  
庭中に降しねいて巧を乞ふ嬉子とあうりて成りよは蜘蛛を乞ふを乞巧をばいり  
花と前庭庭時記よりありの未注無地日万葉門秋の地子咲くる花を乞ふりて  
うまかそあれは七夕の夜は又門秋の花屋に花道花柱子の礼女郎は蘭草葉の花

駒迹

爪髪も旅のすくあや駒むらへ

駒の旅の姿とて美あふることありねとまアしく爪髪をとりあやらるるあたま  
さうえ旅のすくはと又ゆれとこ江次舟と白えり八月十五日に未雀院の侍類  
よりりして十日は用ふ頭書云信濃勅使の牧十五ヶ所延喜式に載する公の一  
あう天皇南殿に御座りて侍をみかきしむ出侍たまは時建礼門の上の  
ま十八

大庭に於てこれを書きしむ裏書云上野九牧延喜式廿八日云七日甲斐の物  
使の牧十七日甲斐徳坂の牧廿三日信濃在月の牧廿五日武藏物言の牧立野の牧  
又十五日信濃物言の牧廿八日上野九牧以上六ヶ日延喜式に見えたりこの外兼  
平官符十三日武藏物言の牧廿八日同小野の牧の御馬を首を筆根原云  
公卿以下次御馬を賜る馬の差違をとりて御前より一様を御馬に  
馬を引分けて使して次將を以て院東宮を去るべき御馬に御馬を御馬に

撰虫

草の多あや里のをれくるまろくむ

衣の少き他には牛七下五五金信加ふるあ一上五をさくすとすり  
おくへしとてぬい草のさやとありぬいさすあり

十月更衣

玉しきの衣を帰る花

あつた花は咲けりとも衣はゆるゆれとすり花はさきさき  
あつたのまは十月朔日百官衣を更衣小日御臣は御馬を御馬に  
さくといふさきさき

五ノ節

舞姫の歌はひ坊を并みり

万葉集卷十二の注に政事要略に神皇正統記の宮中  
神女舞うたはしをいとめをもをりさすまかむをたもとのま  
をいとめをもをりさすまかむをたもとのま  
へりて減り鏡日本誌天平五年五月詔もて五節の朱送をさへり  
てうたはしをいとめをもをりさすまかむをたもとのま  
たえん行りし葉の久しきものこまきほけのあたし國をた  
慮ししる又古事記は五節の舞は天武天皇の造り玉へり  
又えしる神女のことさすまかむをたもとのま  
清見取の葉の中子唐土の帝より貴山をさへり  
しる一玉のえりさすまかむをたもとのま  
人皇のまをりさすまかむをたもとのま  
み神女宮より神女は夏取のなすて廻りの袖を袖し  
たりるんかの玉をさすまかむをたもとのま  
のさすまかむをたもとのま  
うたはし五ノ節をいりさすまかむをたもとのま  
五ノ節をいりさすまかむをたもとのま  
古今集五卷十二の注に神皇正統記の宮中  
行幸に曰土月中の丑に本朝月令に曰清見取天皇より御馬を御馬に  
五ノ節



たのまきんさそく〜時々の明めさる

花下志帰因美景

床入あり物川さきよ花の下

題とてふし分るなりけりさるる〜

留春々不留春帰人寂莫

行はるもこころ〜かゝるの地さるる

よく題のまを傳へて花の後の心を伝へし〜心ほのめさるる花のまをのま

巖風吹袂衣不寒復不熱 袂はかり

綿鏡ハ松風削ハ行ころの

題を清和天とて傳へし〜あつちを傳へし〜池の南とあるは蓮もさる行

池晚蓮芽謝 芽ハ芽芽又芽芽

蓮の香も行水〜ゆるる色さるる

おふ〜大黒の頭あり行あり〜す〜池の南とあるは蓮もさる行

暑月全家何处有客来唯贈北窓風

涼めとて切ぬきさるる北の窓

膝を客りしとわりの首の戸子まぬ人のまあるぬい〜し〜

大底四時に惣苦就中断腸是秋天

雪の旅そぬふていあし秋のそ

中七平話の詞あり上下の語勢〜てい〜上まのま〜妙〜

夜来風雨後秋氣颯然新

夜ま〜夜頃して夕のこ〜して中へ風雨〜

秋の雨をみてはよふ人もは

題の詩ハ秋の且の淋しき雨もあつてはよふ人もは

遠く鐘漏初長夜耿々星河欲曙天 長恨奇

いとう淋の淋しき雨をいつて秋の夜の長きをいつて

いとう先きういあるありて秋

「時守のおといいゆてぬるもり」秋の夜あつてやあつてはよふ人もは

残影燈閉猶斜光月穿牖

獨り寐や泣る白子窓の月

題の心ハ燈火のさえあんとす月海魚のさうてはよふ人もは

萬物秋雲能壊色

去る葉や素秋をえむと秋の暮

霜ハよくものを積ふてい小題のうきを白きとせしめて白葉もわづらひ

十月江南天氣好可憐冬景似春美

十かじも志ハ息つくまき

題意がくぬくふあつてはよふ人もは

寂寞深村夜残雁雪中聞

鉢叩出とてぬや雪の

題意孤村冬の夜の淋しき雪中のうきありし

白頭夜禮佛名經 朗詠集ニ香火一炉灯一盞

佛名の波子腸懐く玉鬘

題ハ老人の佛事執行ニ礼ハ礼おこさるる



まて礼をうらふ杖と杖礎をいふくて礼をうらふ

禪窟の撰いのこしきものもすうのまおしめて

朱注禪窟一公禪窟兼松花園院後土御門院兩代の閑白二閑白の父を大閑  
とし大閑刺髪して禪窟と自称す

目立 鋸鐮 目立 けろよの夕日まいたまつあひ

鋸の目を多てんとして夕陽まいたまつあひのこまりの影を陽ま  
うちまうしてつあひまいたまふと其人ありてつあひまいたまふ

什木突 五月閑あ鶴とふし人の家

夕まかひのいふふよと題をかして五月閑あ鶴とふし人の家  
鉤瓶 鎌倉 孤村の酒店まよふつらと其人かり見まへ

あやふ家のまはらばつこもつこ

朱注并地曰キホウハ草之王簪草と書全体擬宝珠のまはらばつこもつこ  
ソハ糊より表のまはらばつこもつこをキホウみえまいたまふ日こつこもつこ  
ハ東漢髪あり俗ま九十九髪とふ

馬董梅

こがじの花のまはらばつこもつこ

李夫人

越人

魂在何許香煙引到焚處

おけろよの抱つるまはらばつこもつこ

中くまらふあんの後のまはらばつこもつこをけろよのまはらばつこもつこ  
をこいのまはらばつこもつこをけろよのまはらばつこもつこ  
ハ前漢外戚傳曰李延年妹あり漢武帝召宮中又曰婦女五等あり右夫人孺子婦  
人妻是あり漢書曰上思夫人不已方士少翁言能到其神也夜張燈燭設帷帳陳酒食  
而令上居他帳遙望見その時夫人の姿ありて武帝詩を作りて曰是耶  
非邪主乃望之偏何姍々其来蓬又丈夫集子題す雅有教みあき人ハかえるまはら  
まはらばつこもつこをけろよのまはらばつこもつこ

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺花冠不整下堂

是長恨歌ノ内ニ  
ハ雲髻トアリ

そる風よさやゆらこもつこもつこ

川形見とて折くこととみえるものいあるたのむのかさしあつらん  
一、光緒一、花のすくぬは高深の朱注揚貴妃の弘  
農、揚玄琰カ女あり唐の玄宗めして妃とて貴妃ハ女官の位有して后ふつ相  
困ニ比すと云い支本集高遠揚貴妃ヲ題する致川花自々名をふくめる花の  
ソウむりし人の西影そまじの注者云北教蓬萊宮まで道士の足しる安あり

### 昭陽人

小頭鞋履窄衣裳、青黛點眉々細長

外人不見々應笑

物影寄やむりしの老の傳あらん

朱注  
昭陽人ハ十六歳にして漢室ハ入生涯帝の侍つてくもあつしと云い支本集  
ハ昭陽人ヲ題する致高帝の朝臣ハとあふくやむるしきなう明くぬてし  
六十年のそまじまめは

### 西施

宮中拾得峨眉骨、不獻吾王是愛君

花あつらん植かえりし牡丹のふ

朱注  
西施ハ會稽の人薪をいせく賤もの娘あり教王句錢の宮女ありしを范蠡  
謀て呉王におくる乃を明らう之百川学海曰西施を牡丹芍薬ニ比す王隣詩ハ  
芍薬給来切已成愛着終日歷残生吳王若在應多恨写醉西子不與情是ハ芍薬を杜  
丹ニ作り改めしる子細ハ芍薬を植へまじニ三年ハ花さかぬ草ハ牡丹ハ植か  
へまじ益ハ花のよめしハあり是即ち西子ヲ比す也西施ハ天子萌御ありて陵  
集ハ陸園子の致ありを西施ト入替へて訣ハ陵園子トソハ天子萌御ありて陵  
園子入室宮女達の号ありて甚忌ハしきものあれハ美人ト旌替へしと云い支本集  
陵園子ハ題する致二首ハ春の熱秋の熱のつりつ三代も今ハありらん  
あつらん花の戸をとらてかへしその日ありあくらねとあきぢあひこのふ  
三王集ハ月もまはしつるあきぢん松の門りやとあひへと流れてぬぢを  
又白氏文集ハ松門曉倒月徘徊招城落日風蕃琴詩哥ともまじとあひへと流れてぬぢを  
煬帝も陵園の妻をままふと云い

### 王昭君

玉貌風沙勝畫図

よめあつらんままきぬ冬の柳のふ



里虫 杖あつらひ電走ま行 蜀漆が 合吐

あつらひ生れをひきく罪うりれと申を南よものすへきやうふくてあつらひ

海魚 おもしろと鰯川へく分の月 左

食つ精霊をまつ月あつらひをぬかして海をもつこよこひとまてそんぶ

川魚 秋の昏鶉川の史ありや 左

秋の夕ぐれ鶉川の史ありやあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

牛馬四足是謂天路馬首穿牛尾是謂人 語ナリ

一方ハ楸さく椈の残木らふ 越人

楸も楸も時ゆりんを喰わひ牛馬四足ありあつらひ天あり楸も楸も楸も楸も楸も楸も

藏舟於壑藏山於澤謂之固実然夜半

有力者負之而走味者不知也 此語莊子あり主北の 逃るかかむきよとるこ

わらわら歩走の市よりそい

大いい加に榮螺子佐左衣ヤこえとあり列子の寓言の大いある題をとりて榮 螺の分量の小さきものつれとよくあつらひ他りいふが上は山決を有力のもの ありてをあつらひるも榮螺はなつたも一猪つちまもこも大小の所こ そかりれ理ハ一体イヤと之存子も齊物ありあつらひ今をてあつらひし昔北山の 愚公年九十斧してあり時二子も後りて曰大行王屋の二山は道路の中にして高 旅是あやめ今吾二山をくつし平地とせん天下の人はあつらひをんぬ二子の者 共み力を勤へしとりふ二子とて曰かきうある命を以て不測の大山を崩したる いふるをんことをそれゆひて成るを得人最をりしと云愚公曰吾今終 ずて九十までして命且タるありと之とも我心やむとあつらひまへ止す事 多しこ子も孫も終るをんことをあつらひついで其功をあらへ一日あつらひ二子其言 を感して父の志を随て二山の土石を運載して遙き渤海に棄てり其往來寒暑 一多し変す家も渤海に任せる大樞愚公の志の堅きを畏れ即ち上帝を訴ふ上 帝造化の神も勤して夜はま有力の者も二山を負ひて南朔東の地に移さし むこの言列子の寓言あり

絶聖棄知大盜乃止 老子の語

七夕よぬくすくもあきむし

七夕よつりて古よりつらみの附合の詠をよきこころしく書を信じて人書あきき  
 考りていつてるめく七夕も言の袖あきりりりつとあきむし人書あきき  
 ろしあきんとるあきむしあきむしものをおひりりりりりの秋のこころを  
 あきむししむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし  
 ともこれハ語の題をすてこの返りていぢりあきむしあきむしあきむしあきむし  
 〇未註七夕ハ公夏根源曰孝徳天皇天子勝室七年始メテ行ルト云又南雅  
 曰折木謂之津在箕斗之間則天河也則炫曰天河在箕斗二星之間淮南子曰烏鵲填  
 河成橋度織女凡俗通曰織女七夕當度河使烏鵲橋集林太斗誌曰天河之西在星煌  
 と与俱出謂之牽牛天河之東有星微々在冬之下謂之織女

鏡者大

散るく流あきものハ花火が 桂夕

鉷者壽

鶏頭の雨ふるあきむしおうふ 市山

夕さつりぬいふあき

藤房

ゆきすかひのあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし

正二位中納言藤房を歌りて御用あきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし

建武二年三月出家妙心寺の二祖宗弼と号し述倫隱士と号すたふらひこころあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし

師直

うつくしく人まみらるる 長虹

夕さつりぬいふあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし

於て謀きむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし

一休

夕さつりぬいふあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむしあきむし

何九の雲の字の多つてむつろしく注しんれと歎く全くさみあつた只一休  
禪師の大智無辺をよむことこの年註一休禪師の後小松院の落胤名宗純  
整野大徳寺に居る狂雲集より前年辱賜大燈圓師頂相予今更衣入降土宗故茲奉  
還栖雲和上離却禪最上乘更衣淨土宗僧喜成如意靈山哀嘆息多年晦大燈又贊  
法然上人清派言曰法然傳聞法如東安坐蓮華上品臺教智者如尼入道一放起請最奇  
哉又一休を狂雲子と号し禪師後末の禪を捨てて淨土の三昧に入るは九の色  
くの法也といふ宗よりくの衣鉢を上りて他つころものこせぬは月のくもは狂雲のく  
ものせよよのちるる人

法然

鳴き声のはらういともき 鷓鴣 鼠彈

法然がの一枚証文子尼入道無智のとも加つたは同一にして安らりる所  
つけぬははらういともきとよめらるる人しる未注法然の美作の人名は源空  
天台より出た東安五年四十三才まで淨土宗を開き一向専念して建曆三年正  
月廿五日東山吉水よりわけて遷化す時こえつころいともきとら念仏三昧ある  
くゆへは

山岩

かゝ山の岩を減らう岩の角 湍水

老子のいふも亦よく後よりつとりてくることくあつたも水もぬもつた  
減らうてり岩角をもつてしりてこの力がある又問かこころとあゆむ  
の説こ又子も妙におく山の人もかかぬ故にへらしてあつたもぬれと  
あつたも減らうと試みあつて又いふここれへらしてあつたも眼もつてそのへ  
らしたるもの志ぬぬ故よりつとりてある

海岩

か若し海より寺とあつた 全

是の山の若し海の若し對して巖とよめらるる山は表を云海よりつとり

曠野集卷之七

名所

八重うすみ 奥やえ 足あつた 杜國

龍田山に八重の各所ありは表の曠野の境あり奥やえと足あつたの花の山ありはかくは  
見えたりとこも年注教より見えたりとこも林ありは山ありは奥やえと足あつた

此山形を以て林下を以て入るる人々のすこのこめたる子木のためゆゑ  
いふをそのころくまふく入て入るるこを花もこちすし神まつたと  
こころの對あり

### あま魚の魚のや式アウ大に山 荷分

朱注式部の後一條院のころ和泉式部の娘あつ長えの浪歌人の教み入大に山の  
歌り即席の各歌りしてたを白魚の魚の潔くかしとソハハあり

### か崎の山花より 芭蕉

朱注此句発句オ三又平句のまを入る他評は後人のまに當其角申されル  
るに十の山花より入に子駒とめて比良のま根の花をえん或は秋歌おこひ  
よりよりとここれより花よりも松の眺り面ちの山と未定室の中の安室のま  
てあつて山花より一書も花に當其角申されルも右より松のりりあれは波をこまて  
松を流すまを古今お去来おあつ其角去来り年経理屋に我れ只花より松  
の眺りて面白く一書も花をさきの松さきりす眺りてとまハ中三休  
か崎の山花をまの歌りてとまハ平句ことと云

### 葦葉一把かりて花見る阿波ふが 湊水

朱注阿波の葦葉もよの浦屋長あつ葦葉朝臣阿波お花を伊との浪歌おあて  
姉あつらよと申すか伊との浪歌をまいてりるむい哥のまは葦葉あて花見

ある是俳句いあり月と花との心對して葦葉朝臣の法あり口歌註より

### は花中ていん事あゆみ花盛 荷分

もう花トヤとおいこれハ葦葉朝臣の法あり口歌註より

### 狂比琵琶橋眺望

### 雪残る鬼獄さむき 活生 合帖

句仙田地名ハ字の通りよよまぬ必多し鬼獄ハ鬼ヤてあつて鬼獄と申す  
力取の右とあれハ鬼ハ獄ありりれと其ハコよりてよミヤも通ふこととあり  
一本ハ獄の字ハあれハ獄ハありれと鬼ハ獄ハ美濃ニ尾流ハ此に上り美  
のく鬼ハ獄を見たるルハ美濃ニあり朱注比巴橋ハ若士屋より津嶋への往還  
ニあり長ハ六十間余鬼ハ獄ハ美濃ニあり

### 閑たえて家もなほしるもさくら 宗徳 法師

### 美濃の園閑とソハハの山守るよ後の

### 咲あつてを見て吟一あつて

後代のまハハのまハハと又後の咲あつてを見て吟一あつて

朱註丈夫集...の...不破の中山...  
るへし万...の...  
若の名...  
り古今...  
八十

芳野出て布子賣を—更衣 杜國

朱註  
松中の更衣...  
集...  
す...  
重五

麦うちや内外もあき、志賀の雪、

五月雨あつたぬもの、池田橋、芭蕉

この橋へ...  
ぬと詠...  
と申...  
大は...  
一...  
知とい...  
重五

あつたぬもの、池田橋、芭蕉

湖のおまきりり、五月雨、去来

あつたぬもの、池田橋、芭蕉

牛とあし、馬のあつたぬもの、五月雨、一髪

万葉の秋...  
お...  
く...  
う...  
重五

角田川まで

子のはき、岩城の秋、合ひ、都馬、貞室

あつたぬもの、池田橋、芭蕉

みどり、秋のつらき、秋、立貝の音、破竹

こよ...  
す...  
懐古...  
七十







年の陰 詠み似多り旅旅は 芭蕉  
年注忠度門行くぬて木の下陰を宿とせし花やこがいのあらしあふまじしを  
お秋生垣あまの宿を待たるるあまへし

様すく甲斐を眺めて通くらり 夕楓

旅中のくるしきを仰いでいさよ大座人しつとあめやさくらからかきして  
りよこくらししそめよの似とつくと我あり棧界りしあまへし

日の入や舟をこぞ行旅の花 一髪

浪のわいらよ夕陽を眺しるは是れのもく山ををせしあらしきさきへし

のこもくや溪の九曲の生たかふ 荷今

おさ島のたみちとてえくやこまへし

いさく旅さうらあおいぬ衣うへ 芭蕉

我行旅のこころ要すし世のくまのこころをわたりぬと一程の衣ウーあれまう衣更  
のま似をいさくししそめよの似とつくと我あり棧界りしあまへし

あるくの陸列よ

はらばらな旅あふさそて笑ひく 陸風

はらばらな旅あふさそて笑ひく 陸風  
すくもくしあふさそて笑ひく 陸風  
すくもくしあふさそて笑ひく 陸風

旅人ぶぬみ食糧高そぬ安き 冬松

旅人ぶぬみ食糧高そぬ安き 冬松  
旅人ぶぬみ食糧高そぬ安き 冬松

此をこらぬうちよおのる旅ゆき 昌珣

是も旅中のあまの宿を待たるるあまへし  
うちよこくらししそめよの似とつくと我あり棧界りしあまへし

五月のやむ 柱目をむた市の家 松傘

柱目をむた市の家 松傘  
柱目をむた市の家 松傘

夕まよとの丈急の一志ぬり 傘下

芭蕉士を送る

猶まよとせしつぎ多り別うふ 鉤電

行方定めぬ雲の影ありかくりぬみ下五夕に多條別あり

あましくて袂をすする秋の蝶 一井

秋の蝶は自らまてぬの袂へすうらこのぬちるらんまき

秋の風を甲らぬしるわのぬる 野水

凄し秋の風の中果れぬ旅人の別はゆきあへき泪あふくぬぬとまき

物にそは唯さへ秋のかふさよ 舟泉

ぬる別れまのさきさきさきさきさきさきさきさきさき

雲方さきよすうらぬを松よええぬと 鼠降

つもく雲は桂の木のかくらむきて今をえさるうかいゆるあまうおひんをすへし

たふしある行人らよむらひて

更級の月ハ二人のまゐらむらう 荷台

友いぢりかく大勢のあふれとも馬二人のいぢりあふの力をさるは合どやうらやま

越人まゐらむしけしけしけしけしけしけしけしけしけ

月ハ行旅指つめよるのうへ 野水

よかくれ流人の旅路のたゆみはまろい長い程さしあふれさうしてさうさうさうさう

おくらまつおくらつおくらつおくらつ 芭蕉

おくらまつおくらまつおくらまつおくらまつおくらまつおくらまつおくらまつ

物の葉の星もちる行秋のいぬ 踏道

木の葉の星のつきて秋の葉はこもちる行のうらる淋しきこのまじ

狩地橋より物長角のまねむけよ

おくらまつ

狩地橋より麻をあらはれ秋の山 荷台

狩地橋の名画秋の山をあらはれもくあしとく生するまきて麻をつたふらふいの



川風さく千鳥ふくまらば春のついでに是にわたしの舟をこぎ送りすべし  
すむまあるさあはるる

早朝の旅りうたいのやうまつりいふもよし  
甲人のヨるりしのけのちね 宗因

裁人と吉田の驛まで

霜のさけあつりしきん旅あはれ  
寒よりぬえ二人旅をそたのもしき 芭蕉

旅をくえしや浮世の煤拂 全

我が雲の境界多しとて浮世のこころはなほ

冰懐

舟を捨て出る時

きゆる時氷もきえてとて 路通

まて人のこころ

子を捨て守りて田を耕す 杖宣

よむ牛のあはれまじりてん

余はの田の蛙入ぬも浮世のふ 落梧

こゝろをしの境ありて蛙さへ余の田へ入ぬ人として世を越へはを犯す  
ハあるまじきことありとて浮世のこころはなほ

高野まで

お花よりあふさ秘の奥の院 杜因

ちのれは花をたのむるをたのむるは今も我もあふさを犯るは世のほろよき  
よみて佛のあはれぬを秘しとてあはれとて 〇余註あふさ秘のハ世のほろよき  
るまもいふはしてあふさ又あふさ 鬘のあはれもトハリとてよむ

極見て行あるはるを念食 梅舌

貴賤全福とも一併ししてはるる別あり我も極をえあるを念食とてハるる  
を足ありきてともは行あるはるるあはれ

高野まで







ふる甲や福の結まは五年のくま 芭蕉  
久しん旅をうらむくし手紙を我やまをわづらひつゝは直をあらわして涙雨のか  
しりしを編の結まはとゆゑあり

たまのるしをわづらひのくま 陳凡  
四十九年の非を知るよりくそく不斯の神武を悔ひくわづらひ

老をまゐりて髪を先子おとらふ

行年や親の志をかくし 誠人

かくありし人のふりゆくすよりよあまはひありふり父のためふかすとの  
いへるあふさんそこの秋や涙のやあり

戀

春のゆき心あるくの上白のふ 伊勢 一有書

婦人の化粧を扱ふといふもまろく淫犯の女子媚をあらはくす賢女ありてま  
まておとあしやのあは化粧しるよりもんある母とて申の末注清か納言子  
せハをのぬをもちこふものくはよりいぢつとすと妹の巳を捨もや

まぬくや余のことよりもぬえす 陳風

そのぬえなんてはききすり鳴りの故別してまぬれうぢまつことこの年注  
何とくきすりあて開く離別の悲しとあり

せをわづらひるまあるる別れが 長虹

むし干の月を立花するが 文瀾

まの後のいゝる貞婦あとの鏡あつへしこの年注奉白集の古きまくら古きふま  
のうつり唐もかまふてこの年の別れあはし

屯干よ小袖着てるる女が 冬文

たこけ免妹の垣あのみが 心棘

古歌のこゝろをそりてまをわづらひるまあるるあつへしこの年注奉白集の古きまくら古きふま  
むすあれこゝろをそりてまをわづらひるまあるるあつへしこの年注奉白集の古きまくら古きふま  
だつ一括をり少へしこの年注奉白集の古きまくら古きふま  
りつとまをわづらひるまあるるあつへしこの年注奉白集の古きまくら古きふま

六宮粉黛無顔色

宵闈の稲妻消しや月如顔 長虹

題の意をいふつまにかなはくして下心に美人の顔色をふくめくつ妙あり

一めくつ人待りぬるをさるる 尚白

十ひきおろし

しまよしの家さやくましー女郎花 荷今

おれの心よまのまきをわけて家ぬらさめてや花も見て来りぬらん

夫ありらるる吸る妻戸小春

人待らるる心よまをいふと為の妻戸さるるの心をわけてさるる思ふともも

一や待人さるるあふも思ふとももーやの心よまて吸てえいさるる

おれの妻よ後めて淋しき心よま今に却て来りやよらて非いぢりもや再

松の中時あり旅のよめりか 俊似

我意に松の時ありをそめめめいさるるあふらんじとらあを思ふをわすれ

もれ思ひ火燈を吹ていのめん 舟泉

女夫あとのうちつれて巨燈は物うち終るあとのさやうあふまは別れたる女

いたな燈を吹て消へるるれん 嵐篁

巨燈を入つてんまは燈入らるるつら巨燈も消へるる行てのつれあふまは

山畑よもの思ひや甘き川 松芳

人めのあけきかひのものかひのあふらんじとらあを思ふをわすれ

きぬをさぬらんもももも 冬松

五よまらるる松切あふまは主淋しくこれいあふらんじとらあを思ふをわすれ

やとりふう下心いそめてふりぬもあひぬのほしめるあきなりしきぬありん人  
の事なりてくぬるんさしをあらさめんとのかみなり我を人のあひなり集りて  
くぬるやうにぬるに集りて

おそろしやまぬの浪鉢叩 昌珀石

只此一別れのうふまきまより交りては叩き言いもつすこし

無常

末期

散る花を南を河浦陀仏と夕汁 守武

朱注 守武は勢州山田の人氏ハ流本田從二位の神職ニ清節孤糧ユ一テ生涯のことく  
王術ありてあうくし活替すくぬておぼえ俳句いの祖ニ千句ニ折の独吟今王残  
しり是宗祇師の三塘子与子あうへりその後世の中る首をいつまていくもく  
人の教をわめて花梅やうりくも折のまじ申世辞世一裁しかりもまた行末  
も折山火季のねんし花花落葉ハ声聞緑覺の因又朝かひよりあり又ゆらん我  
世に三のちる花の月ハ守武自筆の短冊ニ善徳山マてとあるよし其角難談集マ  
唯一の神職として此境ハみまぬま一是只一時の感隔あらん守武ハ天文三年  
八月八日卒す。注者云其角の評産もすりうは伝道はぬめりくうとてあまらるる

無常迅速

咲つ散ついままきんくの自由うふ 傘下

花子の花のちるまきん如しとこの朱注人界の不足あるたとへにかくのあし

末期

南をやせおむ折明のほき流 元順

南をとい湯命の梵語マてあのみんもありこきて我ハ今死あんとに口いたのむ  
ハ月の入都マてあしきんの青を聞きたのもししと上ハんしきマてさハ  
西方往生の受ま心あうへ。朱注重衝卿書をふる時あまきんの西ハ書  
あうんれハおむこまかゆん今さん時鳥ふるうみまに西ハゆん

松坂の涼歌より人のあまらり

あまらりいじやうらる

橋のうけり散見ぬまかりあり 荷守

涼歌ゆいあひてこころあまもともあまを折るをまつしきんはたき

あまの秋のうらみかたにみちのりぬらふし  
のさかさまのつたをふりしるのまきかたに  
もくしつゝ人の袖のまきかたに  
いもつとの道にまきかた

ふのしはかあへくはらちもある  
去来

りぬらふのうらみかたにみちのりぬらふし  
のさかさまのつたをふりしるのまきかたに  
もくしつゝ人の袖のまきかたに  
いもつとの道にまきかた

せそとやく毒のまきかたに  
くつ

ぬき月の桐のこまをあへく  
野水

とくもかたもあへく先ありあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく

辞世

ありぬあへく燈の電い  
主コ跡

あれも大分はあへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく

あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく

子あへくあへくあへく

似多散のあへくあへく  
落悟

もしあへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく

一原地より

あへくあへくあへくあへく  
釣雪

あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく  
あへくあへくあへくあへく

あへくあへくあへくあへく

あへくあへくあへくあへく  
荷今

あこねい花袋さく家のかぬいぬい花をくちて此の秘をさくしその心を  
たたくてうあしめらるる

妻の追ふ妻よ

をみかへし志その里人それたのむ 自悦

比多い女ありし人このちの宿のつらどやちあぬよちをたたくし  
るてつらういそあそおの山の思え流よちしゆたし申まらさるる  
の山あれを里もあふんりふんうてありぬふし。未注新古今い  
あぬかさいあまき人の旅のさやうあしかならん

李下り妻のみまろしをいふて

祓ふとほやう多くいえ行ふかろし ちま

李下へ送るしりあし上五におまへんりかひんんすもりきてあふ  
へいひえろごろうさあしさいとあふんりやとこひえいひゆし  
や行のさあらきあし

コ高ガまろりし後

その人の軒さえふし秋のこき 其の甲

あふてあふしをいふもなすのこあふり軒をかりても聞いも  
へあけけらなりあふこいあふあをまあふんりてありぬふし

あまあふんり子のちあふを

たせあふやいしり食くふ秋のこき 尚白

中七平話うて人をほらしむぬらうあけり感さきん。をさあまに長興チオナキこをこ

あらくの追ふ妻よ

埋火もきゆやあふのさるる 芭蕉

下五活あてて人をあふらうた

旅のさあまろりし人

あつげのさかぬうちるはなう 風障

夕をかくのさあふ甲七人をしはらそを刺しむの秋アハにはのほ字あ  
やまうし古言抄何王ゆき園阿和由岐園園とも同じ知字正鑑抄注雪日本  
記古事記万葉和名た何王ゆき園阿和由岐園とも同じ知字正鑑抄注雪日本  
りそとあれい又共よあとも書へしとあれとあふささあふりあまかく





わのまの女房とち女成仏のちかへきほをきいて志人のあはれをいへる  
あまのこころをいへる人よりよそをいへる人より女房の罪のふりきまのあはれをいへる  
法をいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人より  
いへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人より  
いへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人より

親馬の屋上の様 呼ぶみく 俊似

屋の上のさかたもきいてまたあはれいへる人よりいへる人よりいへる人より  
いへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人より  
いへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人よりいへる人より

古寺やつるさぬ経のりやま 一井

三井寺の鐘のりやま 一井  
つるさぬ経のりやま 一井  
つるさぬ経のりやま 一井  
つるさぬ経のりやま 一井

ハ鳴りて

海土の家聖よいこむ深き 子爵

海土の家聖よいこむ深き 子爵  
海土の家聖よいこむ深き 子爵  
海土の家聖よいこむ深き 子爵

咲みくふへんあまのねねたん 一井

不愛あまのねねたん 一井  
不愛あまのねねたん 一井  
不愛あまのねねたん 一井

夏山や本陰の江湖部 兼葉

夏山や本陰の江湖部 兼葉  
夏山や本陰の江湖部 兼葉  
夏山や本陰の江湖部 兼葉

ちあ良くて

灌仏の日ままもまも麻のよみ 竜蕉

灌仏の日ままもまも麻のよみ 竜蕉  
灌仏の日ままもまも麻のよみ 竜蕉  
灌仏の日ままもまも麻のよみ 竜蕉

灌佛の真蹟は 尚白

高野にて

腰の扇礼弟のけしん 一電





相待のまじらえまん松の陰 鉤雪  
松を小こころと相待をこころとまん松のあつたまきこもあまきまきあふ

平等施一切

相待下多行人をとめらる 俊似

仙の教の周遍あるを嘗て人まある施の志を嘗てこころあり

稲妻よ大佛をむむ地牛が 荷分

こころもまき地中をていれめいふつまを仰せぬいふと大仙のお教とあふ  
まねくる心あふんとも渴仰のおおしをふりあふ

垣紙よ川道すぬくも水波が ト枝

とせ成のちよのうこころと成いふり川道をぬきぬけるこころありまて下こころい道意  
まよふゆふのまき世のあつたまきもぬけるあまう

ある人四時の景物ありて水鶏と鶉とを

不食不図其心を感して我も雁をくらひた

厚くもぬ心佛よあふいぬそ 荷分

肉食の佛の戒をむむのまきあれもまよふ其教のこころをくらいまきんのいそふ  
りか桂香をすはまきまていりやぬある人の心流を感してこころも其まきま  
したまきあれ佛のこころまよふあふいぬそ

ある寺の真行子

燕もは寺の教くくして 其角

景物のくく燕もは寺の教くくして其角  
つまあふれも二十五年に月を輝き却てうらまふんとつらあふつ  
例の如くおのれもうらつてつらあふつらあふ

進も出て坊まをりしや月のま 一井

法光の力あふれい眩先すくまわらまんだあまは月のま射くをくしつら

鉢の子よ木陰をうくる法師が ト枝

頃も鉢子ありいぬい金髪をかあしこころ布施あまへありぬあふ  
人のせまらあつていそむしらるま

まゝのくぬき

衣着て又もぬしく一時雨 鼠俾

川系がすいぬきまを旅人のあそびのうらやまの形取の村田共高をよすゆゆと  
鎌倉の安國論をよす

角ふとこの涙やあまの氷るん 裁人

祖師のソサそのまをわすれぬかあまの氷るんか  
蓬上人正嘉の末より文應の初まで四十年の間岩屋は筆りて安國論を製作す

古寺の雪

暖や伽藍の雪見廻ひ 荷分

是の願詠うて古寺に破壊しころきふてしそこて夕アの雪こいぬきよて二六  
りまなりと互ふえまぬしなるなり

同

雪おのやかかる二玉の片統 俊似

ナノまの二玉堂もほろを根よりぬか令剛力士のういふも雪おの  
しの名残りをわたりてありぬきまをよすやまのま註二玉左の密迹令剛右の  
那羅延の本地大日佛法應護の為め向ふの二玉明臺

つくろおてまぬかた雪佛一井

雪うてつくろしるものあれ朝日のかかるやまのまゆものあれとます  
りまこいさぬきまぬかたの自思を待たぬかたの人もまたまを記しても首く  
つてまぬかたのまぬかたのまぬかた

新なまのくぬきも神たぎ 文瀾

神たぎのありぬきまをわすれぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた  
古人のこころつらひをまぬかた

千観る馬もかきりし羊のま 具角

常の馬のソサかきりし羊のまのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた  
てまのまのソサかきりし羊のまのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた  
若かりかきりし羊のまのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた  
まともかきりし羊のまのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた  
とまつて羊のまのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた  
故よその像をわすれぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかたのまぬかた



あきふきさかしのさくらまじりのほろもさそめいふのまを導くらん

如暗浮燈

秋の夜やおしゆりまに記せる

ものよあそりぬて産豆をつらむうこそく何となく若しは対側ある人のうき記し  
しむつてくれいふまにま言つきてやめあきらむやまあまし記しそく  
だはんま修ねみそ何し大ささうあつやうどやとこ。懼おしゆおしえおし  
やくたふま行のそいふまに古ま柳

神祇

古宮や雪志のなる獅子頭 釣雪

古宮の居指もりほろあてあすすきささあうへし大なりかくあれまきうあれん人  
の安全を字す獅子頭の威力もほろあてあすすきささあうへし大なりかくあれまきうあれん人

二月廿五日奉納子

きんふまや廿四日の月の梅 荷兮

二月廿五日ハ祭神の冬あうあれハあすの居命のそと別して梅もるハハハハハ  
こまは法を樹のことあれハハハハハ

志んくも梅ちから庭火ハ 左

首もああひてまふ柳の梅 篋洞

上下のせいふぬやうみ柳の梅 昌碧石

燈はくすうあふ柳の中 鉤雪

何やらをらめハハハハハ 柳の花 誠人

差えあくあまきそハから柳の梅 舟泉

自慈の理をもて啓を下る我神志のやまを現る長きあきなるまに設け神をや

月代も志するの梅の意 雨桐

梅の一片はつちうと頭をあちいるがみ志すこもあつてありしと志するに  
没入るうて神を敬する人の誠なりききてさるる人多し。月代は甘やかき

門あけて梅の瑞々離をうらむ 重五

梅の三つきをうらむと神を敬むりつとふく敬してつくことを  
ひさうこきまその九月天満宮のま納ま

鈴馬見る人の後のさくら 玄寮

社頭のもやうして諸人のあはれまあつていふのさくらしてしてさくら  
の風情目めゆるこのま注鈴馬神馬を献ふやよよるものま

花のよみあてまはる社 鈍可

この社頭のあつたのまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社  
ては利登のあるまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社

宮の後川後に見るさくら 李桃

社頭の花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社  
あつてまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社

花のよみあてまはる社 李桃

何よりまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社  
とあつてまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社

郭公神楽の中と通らる 玄寮

神楽のまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社  
あつてまはる社に花のよみあてまはる社に花のよみあてまはる社

宮字の灯をわくる火事 亀洞

灯をわくる火事をわくる火事をわくる火事をわくる火事をわくる火事を  
わくる火事をわくる火事をわくる火事をわくる火事をわくる火事を

破扇一ふみあつた法杖 未学

濕熱の気の身をやうして新法を定ふるあつてのま注は杖の示す篇に  
破扇一ふみあつた法杖

川原を癒まふは法杖 荷兮

癒まふは法杖を癒まふは法杖を癒まふは法杖を癒まふは法杖を癒まふは  
法杖を癒まふは法杖を癒まふは法杖を癒まふは法杖を癒まふは法杖を癒まふは

出がしや里のつねく津巻部屋 尚白

常の木の葉のさやうにふみ津巻をたきまぬれをも用ひる其のまふまきつて

け月の恵比壽こころふみすんま 松芳

神を月の津巻にあらまぬれもあはれ極のこおひれまきと例の十月戌戌に

冬さよぬや祓宜のさけゆる油筒 落梧

社頭へ火を灯し油筒に津巻をこまきまきとてあらまぬれ極宜なるあはれつて  
下けこころをさうしとて早まきとて冬さよ津巻あり

若宮奉納

き、志ふぬあまもめに神々楽 利重

神々こたのゆやうえとまきまきとておひのりておひさしとておひさしとておひさしとて  
すふるさかきとておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとて

海の方なるるに水の神々楽 野水

おひさしとておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとて

てなまぬりておひさしとて

鈴鹿川 祝明の旅の神々楽 昌珀石

鈴鹿川とつちま津巻の鈴鹿川に合はれとておひさしとておひさしとておひさしとて  
しておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとて  
皇即ち天武諱ハ天傳中原瀛真人又大海人天皇皇子ヲ襲ヒ麻呂を経て妙処に至  
リ玉ふ麻呂伏免と云はれ是二時ハ山中一人老翁ありけり我ハ此山の神大山神と  
りして案内ニ添奉りけり川ありて流るる舟ありて自ら取給を合はれおひさしとて  
天皇を負運しぬ故に鈴鹿川とつちま津巻を合はれ油火大明神とつちま江州甲賀郡  
日あり今の坂の下の宿に鈴鹿の駅あり鈴鹿山の下あり多岐の坂の下に小鈴鹿  
の神社ハ天照大神の流魂瀬織津姫気吹戸まき速佐領良姫後侍姫を合はれおひさしとて  
山神社とも縣主神社ともいふ大神宮へ飛宮立の山所此処にて中後一り小伊勢  
川の神ありありありありありありありありありありありありありありありありありあり

かつらきのかねえりありとておひさしとておひさしとておひさしとて

橋杭や法程のちも焼もいし 卜枝

橋杭に伊その時をいひわたりておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとて  
おひさしとておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとておひさしとて

かきやうにあらはし

祝

肩付ハタテの琴入ハタテありぬ七ナナ閑シヅカ冬フユ文フミ

肩付ハ琴入ありて琴人の琴意を丁寧にあつたものありてそれよりあそびへて名正の肩付ありてし心を祝しては但肩付をいひかやうありありの年注年注を老をたして和歌の体はあやうぬ玉津嶋野をいつてをいひ注者云年注ハまといつれを詞にしむとわたりていぬるを格ふ格ふをさしてわたりてやうありぬるもあつてよくてたりてあやうぬるを格ふとよとそ玉のをもあやうぬるの詞まりの詞まりの詞まりをいひてあやうぬる

歳トシまマちチもモ休ヒをオ決ケはハ是コノ由ヨ也ナリ 重五

千代チヨの秋アキもモはハひヒもモあアらラしシをセ朱ス

君キミりリやヤ三ミかカくクこコとトあアまマいイ玉タマ橋ハシ 敏人

玉つとせの千代年といふもは玉子の詞まりの詞まりの詞まりをいひてあやうぬるを格ふとよとそ玉のをもあやうぬるの詞まりの詞まりの詞まりをいひてあやうぬる

若ニホ草クサの何ナニ日ヒもモはハひヒもモあアらラしシをセ朱ス

いイまマはハまマるル冬フユのノ上ノみミ枝エつツらん 亀洞

いまはまるといふもは玉子の詞まりの詞まりの詞まりをいひてあやうぬるを格ふとよとそ玉のをもあやうぬるの詞まりの詞まりの詞まりをいひてあやうぬる

千代チヨの秋アキもモはハひヒもモあアらラしシをセ朱ス

志シはハかカくクのノ店テンもモあアらラしシをセ朱ス

先マサキ祝イハヒへヘ梅ウメのノ人ヒトのノ冬フユもモあアらラしシをセ朱ス

おまへへんこそやまはつらうありてあつたものありてそれよりあそびへて名正の肩付ありてし心を祝しては但肩付をいひかやうありありの年注年注を老をたして和歌の体はあやうぬ玉津嶋野をいつてをいひ注者云年注ハまといつれを詞にしむとわたりていぬるを格ふとよとそ玉のをもあやうぬるの詞まりの詞まりの詞まりをいひてあやうぬる

異イヘ亦モト上ノのノつツきキ

大井川オホイヅミガハのノ形カタチあアつツ鳩トビ田タ塚ツカ也ナリ氏ノのノもモあアらラしシをセ朱ス



十二のふれの宮の吹かき大井川 芭蕉

三川のしんまて

十五のふれや梅まふすふる十園子 左柳

十六のふれよもてあつらひをいさぶ 里東

十七のふれ子麻の星をやまむ 楚舟

註者云新花つゝ 昔々のひびくとのまをいへることを一の修行あり  
ゆりやきよおとひしちへうしに 銘提て道のゆづを境のく平りのあるれをも  
登りのこ太いまおのり 近江のやまのひらるとまを境あふまふたふれを平りの  
むらさきまのりあり

曠野集頁外

誰か花をおとさうらん たぬる花をききぬものもあし 勿れ

市中まあつて秋のふしきとらん あふれを朝のふしき

我 あふれを 東四明 年注東の東叡山に比叡山を四明と云

山上の自然あり 花のこころ 花のこころ

こころ 永註佐川田永井家の

下の人あり 地 のよし 山あきれくと 山花まの地の

あふれ こころ へる哥を 実なるんすま

麦喰 なるん とわりぬ ふるふ あり 古教ハ

あふれ すま 此の尾陽の 地 あり 子

他として、世蕉翁の侍へしをあらぶるも、古言、桔みお

但し又等閑知字正鑑抄 崩しむさいつ頃先ッ頃先ッ先頃

してかく 田野の居をうつして、実を此句を感

すむりしあるに有る人の中子流の物語

年註一人をくみと多き逵りれく人ありて

神色獨變 獨色を愛する有り、誠のありよへかたさ

る事たのこしし、猿を聞て実又下る三声の

あここと永注杜甫秋興の詩 しくるも、実の字老

杜のこころあるをやはうの心を志として

麦を已まき花よおひきぬるあは 素堂

此の「前書」は、つる 時川由昌也、花の香と露水リテとを合せて、新 花子一ひ

この文人の事つゝしてとくららせしを  
三人崩れ、歳なも吟して

山崎の猿の思ふこの用を、つらるり

猿の跡も志くらり、春の来て 荷兮

中三「猿」の「よ」のかけうらふと、山崎の猿の思ふこの用を、つらるり  
の「来」註者、ちろい、まもとるまを、これれ、こころ形、こ又「お」の「ま」を、つらるり、  
り又「猿」の「跡」を、つらるり、ちろい、まもとるまを、これれ、こころ形、こ又「お」の「ま」を、  
組む、つらるり、まもとるまを、これれ、こころ形、こ又「お」の「ま」を、  
り、つらるり、まもとるまを、これれ、こころ形、こ又「お」の「ま」を、

くものありま本妻よりのちきそく誠の山海の旅一らも雪うきまぬ男をあらわすとら  
もの志つらあるおこしきあり 裁人  
おこしきあるまことつらうらむ山をうらうらみゆくはこころと見て  
おこしきあるまことつらうらむ山をうらうらみゆくはこころと見て

川の石月待閑のやすらひ

水

風の月利を初秋の雲

今

武士の雅集つづ山もゆきとし

人

志のつらみつて浪の鳴る

水

袋の師もつれまのう

今

つらみあるまことつらみ

人

まかつて松明あきる万の端

水

千々のつらも北山のつら

今

娘さくら一重櫻も咲残り

人

是の用い人倫用よりよつたてのまことつらみを閑美まふ山奥まで見て詠閑修行の行  
御法師のまこと一夜の宿りをもととそよ土地の外は活き、て人をして語をさう  
かゝるまことつらみ

前々のお法師よりあつたけましらまことつらみを閑美まふ山奥まで見て詠閑修行の行  
御法師のまこと一夜の宿りをもととそよ土地の外は活き、て人をして語をさう  
かゝるまことつらみ

前々のお法師よりあつたけましらまことつらみを閑美まふ山奥まで見て詠閑修行の行  
御法師のまこと一夜の宿りをもととそよ土地の外は活き、て人をして語をさう  
かゝるまことつらみ

前々のお法師よりあつたけましらまことつらみを閑美まふ山奥まで見て詠閑修行の行  
御法師のまこと一夜の宿りをもととそよ土地の外は活き、て人をして語をさう  
かゝるまことつらみ

前々のお法師よりあつたけましらまことつらみを閑美まふ山奥まで見て詠閑修行の行  
御法師のまこと一夜の宿りをもととそよ土地の外は活き、て人をして語をさう  
かゝるまことつらみ

前々のお法師よりあつたけましらまことつらみを閑美まふ山奥まで見て詠閑修行の行  
御法師のまこと一夜の宿りをもととそよ土地の外は活き、て人をして語をさう  
かゝるまことつらみ

秋の夜は北山よりへりてさくらまつりて前夜のちとて

あてこもるきり力夜うふ 水

前夜の夜を極の二をまつりて花をちやみくれば秋の夜は

雨夜の泥のやうなる物思ひ 兮

李白の三白十日研て泥の如くもくくる泥のよりぬき

秋をちるふく望人の妻 人

秋の雨へまて下七のやうなるるやうなるものもより

明日やう西も来も鐘の声 水

前夜の妻の心よも悲しむた麻さうはあまよりつづぬ

利根の川船 兮

冬の日のでりてかき日雲 人

前夜の用と場とつけに川舟のころじまある一利根川

形子の行とお縁のちきて 水

ふりてよの夜の塔のあめ 兮

前夜の用と場とつけに川舟のころじまある一利根川

孤のまよや人のるふん 人

前夜の用と場とつけに川舟のころじまある一利根川

柏木の御まの煙のつくは 水

前々の時ほど深白の柏木の何れしり十三の葉を巻くのでん格のあえつゝあんな  
多ありはまは狐つきとや人のあんなんともあり

たつやくいとのこゝろあゆみしる 今

これり前々の柏木あしは何れかたしもの思ひまきつらまじぬまうちり女房  
あんなまきつけまらうまこのあんなまきつせのあてたつやまのあんなまきつこさ  
わいしあんなまきつこさ

月の影より今よりけあ様 人

月の定中さまりまは前々の時ほどあ様の臨のよま今よりつら

秋よりあより里の酒桶 水

前々の用ありはまはは南方よりあよりまは片田舎と見里の酒桶とハ大下りのあ  
井とまらあよりまはは酒桶と見山とまらあ

雲霞あしは井井あはるまきつ 今

其人とよあよりまはは酒桶と用まらまらハ井井あはる人あよりまらまら  
まらまらあよりまら

うきと志のふ不破のあ化 人

これり豊年まらまらこいける前々の人あしとまらまらまらまらまらまらまら  
次公の庵後不破萬他十八景人々まらまら自害す文禄三年七月十九日

うきと志のふ不破のあ化 水

こゝまらして前々の注の不破万他まらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらあよりまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

吹雪のまらまらの子のあつまに 今

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

おすまのんまらまら 人

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

あまのまらまらまら 水

前々のあまのまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

花がけり都まらまらまら 今

匠に色を染めたりして泉をふりよめたりつゝ前より後までかくらぬ  
控へて暮らる奉加帳あり 人  
まこと心かよふもかたを控へてあきしつゝ一を待てしつゝ

墨染ハ正月こころをさぬつ 水

家の花をうらけぬを厚くふりよめたりつゝつたりの奉加  
帳よりよき奉加の衣よりけし奉加をぬきしつゝ

大根すきさき干しのさかー 号

前よりすきさき干しのさかー

遠浅や浪よ志のせん例とら 亀洞

此の遠浅は海つたのしきありて海注を海に沖あはれ  
沖より入はれしきありて又常におもひたれぬや  
てい難かしくと浪のたふし

はるのあつた酒のさき里 荷今

世の場をわたりて月を附て奉加をふりよめたりつゝ

おとこや早きつらうを解て 日垣石

おとこや早きつらうを解てはるのさき里

百三の徳のさあふりつ 野水

家にお早くあつてつらうを解てはるのさき里

夕月の雨雲の白さをうち 海舟泉

是の前の場をわたりて月を附て奉加をふりよめたりつゝ

おとこの徳を流しにせ 釣堂

前よりあつてつらうを解てはるのさき里

秋のさきもさきぬ海を 筆

この前の場をわたりて月を附て奉加をふりよめたりつゝ

一弦をくして日三も古鏡 亀洞

道のゆきまききりしる 且祢の林 荷今  
ふかまの森あふく

よする 留る あり 年 昌 珀石

いづつともあつてゆつこみ花送る 鉤雪

湯あまのりもの ん 舟泉

涼く やと 蒸も 川 端 野水

あふく 月 今

秋 見 女 車 の 影 電洞

油 玉 海 け け 法 掃 鉤 雪

時 子 もの 花 の 春 昌 珀石

八重 山 吹 水 歸 水

二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

日のしんやふゆきん 暖子 舟泉

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

亀洞

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

向まて突やうの山やうて 荷台

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

垢難の人の急もの産 昌珪石

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

能所して干魚の減えつて 釣雪

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

かやいふはまの例のこの山やうて

舟白氷

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

むく結子抱いつて又睡州 野水

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

行旅子よいしむ 荷台

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

亀洞

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

釣雪

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方

昌珪石

前の方の山頂の雪の厚さの計り方  
この山頂の雪や氷の厚さの計り方



くすくすおれりあゝかちうたぬいさよまももつこころあはれりとあふ

やいせもの秋のやいあつある 野水

前々の力を振舞うて附りり秋の秋を何處を定む言あつたりとり仲立の力ある人して  
さて前々の志をくつくる力をこころに全座をわけて力のこころをわけてしらすを  
化去のくころをわけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

つとくともあはれりあふ察の定 舟泉

前々の秋枝をくつて附りりつとくともあはれりあふ察の定をわけてしらすをわけてしらすを

秋の日のや見らら子泥の照りけて 荷今

前々の春をわけてしらすをわけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

桶のくくくくく入すまひくく 昌珀石

前々の秋の日のや見らら子泥の照りけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

前々の秋の日のや見らら子泥の照りけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

人あまゝ秋のなして花子行 釣電

つとくともあはれりあふ察の定 野水

前々の秋の日のや見らら子泥の照りけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

美しき秋のなして花子行 舟泉

前々の秋の日のや見らら子泥の照りけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

柳のくくくくく入すまひくく 柘芳

前々の秋の日のや見らら子泥の照りけてしらすをわけてしらすをわけてしらすを

子次声の字印とあり又かまきり秋のまよひう木料のうらみやうつめをむ  
夕霞津ねとてかへるらん 冬文  
ホミの具持の用をうけまね時刻をつけて頼りてうらみ○年注中羅姐は日朝霞不  
出市夕霞は千里よりわらぬに夕霞すこと又平白夕霞は夕霞ものうてつ  
るらん」唐実の間夕霞は唐ものうらみかへるらん

かへるらん 荷今

前々も夕霞すことかへるらん

秋のまよひとてあまのこゑ 松方

前々の力ゆけとてけり所入り具持を空の池の伝をつらうとてうらみまよひ  
俗語まよひとてあまのこゑ 俗語まよひとて

そいまよひとて 舟泉

前々も夕霞すことかへるらん

かへるらん 荷今

かへるらん 冬文

前々のもの拾ふことありて附たりおもむものかへるらん玉の枝の孫茶  
との拾ふことありて附たりおもむものかへるらん玉の枝の孫茶  
つとまよひの枝をまよひとてあまのこゑ  
かへるらん

火草の皮の衣を 舟泉

前々の木くりの俵ありとて附たりおもむものかへるらん玉の枝の孫茶  
つとまよひの枝をまよひとてあまのこゑ  
かへるらん

涙を 松方

前々も左大臣あえのこゑとて附たりおもむものかへるらん

さよみとて 冬文

前々のいそのうらみの中納言とて附たりおもむものかへるらん玉の枝の孫茶  
つとまよひの枝をまよひとてあまのこゑ  
かへるらん

酒の 舟今

前々をふん城のあけしけしるなきてつづなりしつゆのちもや  
て人丈大工とての入はしきふと

哉年を頂れまはた日をいま 松芳

前々を下戸とてつづのいふ下戸の世懐とつづ

よまする双紙の紙を先する 舟泉

前々の人此人腹をなをほむと云所因言まてまはしきと

あふ事もち志ありしる花の鳥 荷今

これやをたつとつづあしるわいけ九つありししとてつづりてさるるを  
いづ前々の紙をいすもあはるいすもつづりてつづりあめりあ女  
ふぬあつとま

月の暇やる井の君 冬文

前々女子のつづりしつづり井の君をさるりつづり年注夜衣よ  
諸いしよ威儀師の徒とつづりつづりつづりつづりつづりつづり  
井の暇まつと

灯よよをかりいつとも 舟泉

前々の月の暇やる井の君をさるりつづり年注夜衣よ諸いしよ  
未註は使まつと君をさるりつづりつづりつづりつづりつづり

新珠くめてつづりつづりつづり 松芳

前々の物をさるりつづりつづりつづりつづりつづりつづり

隆辰も入さるりつづりつづりつづり 冬文

前々の人をほむつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり  
還俗も小唄の上のつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり  
つづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり

十日の夕暮のつづりつづりつづり 荷今

前々の老人のつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり  
つづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり

山里の秋めつづりつづりつづり 松芳

前々の秋のつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり  
つづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり

長持つづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり

つづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり  
つづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづりつづり

百廿

前々の長持りやて来くるくまぬ所の其人のつらさをうけの傳へ  
馬のうしろにひきかゝるのしやあひへく 冬文

前々の水田の月形にやうにうしろに其地ちをむすべし  
さしにせに井の富の冬之雨 舟泉

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
是れをよめて著るまあるていふ 松芳

前々の多き井の宿の宿の月形にひきかゝるはつとにせうして  
いふは 冬文

前々の人をもあまたしや下都をうけやするよりくこの世に  
暖るくく 櫻葉のよむ 春分

前々の上層のきしゆのきしゆに高きあはれ世のまはりの灯りのこと  
をいふは 冬文

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
けしと表するまあるていふは 松芳

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
時分はるまあるていふは 舟泉

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
貴戚ののびにせしめるまあるていふは 春分

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
いふは 冬文

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
まの物あるまあるていふは 舟泉

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
顔するまあるていふは 松芳

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
まの山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし 冬文

前々の山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし  
まの山を遊ばせしついでにその地ちをむすべし 春分

前々の... 雑... 姑...

本... 待ぬ... 荷兮

人心... 待ぬ... 又...

雨... 野水

若... 用... 此... 雨... 野水

川... 批把... 左

前... 美... 注... 川... 批把... 左

前... 又... 注... 此... 批把... 左

月... 秋... 左

前... 月... 秋... 左

一... 荷... 水

前... 一... 荷... 水

初... 左

前... 初... 左

星... 相... 兮

前... 星... 相... 兮

土... 左

前... 土... 左

京... 判... 水

前... 京... 判... 水

前乃の人位をつらふことありしは

通函のついでにこけて所あり

水

前乃の人をうらむに猿猱する体とありしは

六位ありし意のつらきは

今

こよみの前乃の意のよひもいひてその人のなまをいふに六位は上位の意よりよきをいふこといふも六位は地位をいふに位とは人の位なり子書平朝臣前宮へあつて子のつらふはもとよきをいふにいとあはれなりとありしは

代まのつらふはつらふに

全

前乃の意をいふにつらふはつらふに活ありとつらふにうらむはつらふに

銭一貫子 艱一節 水

前乃の人への想いと前乃のつらふにうらむはつらふに

月の朔をつらふに

全

前乃の銭一貫子つらふにうらむはつらふにつらふに

花咲く心まめあり

前乃の書をよする人をつらふにつらふに

天竺菜子 活會あり 春のくれ

前乃のすくやのつらふにうらむはつらふにつらふに

かひのつらふに

前乃の國人春夕も直して附乃の着経を静まんとつらふに

多くとあつて

前乃の人をうらむに古言標に織にありしは

夕をまよひ 酒つらふ



前々の男をいふ才多きものもなして附たりその家のむしめりあひふもあはれぬ  
前より一二年その家より出でて奉公あつてしるを附たり

衣をつけて 住居うらやめ 分

前々の心を持つて附たりその家のあひのつれをつらう

三方の靱ひらきしり 吹まらる 左

前々家路の体あれ附たり其の家の方をつけて次の方へ返向をいかにしり

供奉の多の鞋を 谷へもききぬ 水

前々の三方の靱をゆきかめて附たりはきき返向を定めさせて供奉の体をもんせり

ほくやゆ壇大原に 戦の花 左

前々の法華のぬれ附たりその法華のぬれをさため山極の法華をあらうと附たり

人おひま 行とるの川山 業

前々の花さかりりるを地を地より人の集つてあつてたつたりつたりその思入  
の用をつけてありあり

月さし ぬゆる気色に 昼の目もあはらるる お

もくろさき 柄をさし いろいよま 園と 宗澄

法師の月をすむ ○イホ花草命と誦ト 祈るるしあり すすよ。

夏の夜 の麻とりよ 赤ぬその 藤も やまなつまぬ

月と柄をさし いろいよま 園と

前々の柄をさしいろいよま園とんこれのまはらへき園やあはれんこのふ  
ふんといふをいふとまはらへき園とんこれのまはらへき園とんこれのま  
のあめゆい月を綱をさし我大君にまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ  
すしすむ力を我ものかぬは園とんまぬまぬ

牧のさるる 夏の夜の 越人

照ハ前々の余勝をあらわしけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
八月の月のたよなりたて但し馬場にてまらるる衆の服能く化例に

とつとつを 誰か 思ふて ころふん 傘下





前々の人をいひしるる人よやとさかめて附りし人の梅よふらまで畑のん

我まふよりのけせをさくくま 全

前々の畑のん... 世の無きま... 我を仙門よ

床をりら書り文字のゆく 下

前々の遠くを... 見えて附りし人の用... といひしるる

花の賀よこるへうきる涙落つ 全

前々の文字のゆく... 花の賀よこるへうきる涙落つ... 又花の賀の四十

着もの糊のこもすも風 人

前々の花の賀よこる... 着もの糊のこもすも風

とつけて其人の... 花の賀よこるへうきる涙落つ

うち群ぬる浦の心家 左

前々の春風を附りし人の心家

内をりてあゆる申る大 下

前々の心家... 内をりてあゆる申る大

酔ための心を吹く 左

前々の心を吹く... 酔ための心を吹く

角志りある雨の降 人

前々の雨の降... 角志りある雨の降

歌合獨古鐘 全

前々の鐘... 歌合獨古鐘... 百十二

まゝの献立のこふちひひつう 下

前々の致合急の由借しをえて附々の積まをりけい<sup>ら</sup>○未注坂阿<sup>り</sup>古昔よりい  
る題をまふ<sup>る</sup>をりけい<sup>る</sup>即時<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>り<sup>る</sup>古昔よりい<sup>る</sup>のま<sup>る</sup>於<sup>り</sup>積ま<sup>る</sup>  
しとて又袋<sup>る</sup>は<sup>る</sup>積<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>留<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
きて函<sup>る</sup>を<sup>る</sup>し<sup>る</sup>は<sup>る</sup>あり

灯臺の油をよして押がし 全

前々を客もけいのま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ひ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>つ<sup>る</sup>け<sup>る</sup>い<sup>る</sup>積<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>古<sup>る</sup>勢<sup>る</sup>と<sup>る</sup>て<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>の<sup>る</sup>由<sup>る</sup>を<sup>る</sup>附<sup>る</sup>  
白<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>あ<sup>る</sup>こ<sup>る</sup>を<sup>る</sup>い<sup>る</sup>し<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>全 人

前々の場を定めて附々の夜<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
ふく風子<sup>る</sup>の<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>全

前々のま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>に<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>あ<sup>る</sup>く<sup>る</sup>風<sup>る</sup>と<sup>る</sup>あ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
のこ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>

は<sup>る</sup>こ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup> 下

前々の秋<sup>る</sup>と<sup>る</sup>あ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
ル<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>

も<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup> 全

前々の秋<sup>る</sup>と<sup>る</sup>あ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
前々の人<sup>る</sup>衆<sup>る</sup>お<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>

人の流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
人<sup>る</sup>の<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>

あ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup> 下

前々の人<sup>る</sup>を<sup>る</sup>附<sup>る</sup>々の<sup>る</sup>前<sup>る</sup>々の<sup>る</sup>人<sup>る</sup>か<sup>る</sup>し<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
て<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
直<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>

干<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup> 下

前々の所<sup>る</sup>中<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>附<sup>る</sup>々の<sup>る</sup>旅<sup>る</sup>人の<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
に<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>  
の<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>

あ<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>り<sup>る</sup> 下



とこいて飄草の大きお石を所りていひて一ひろ力あり

風もあつめて帰る市人

蕉

前々の瓢を附けかた人の足やとて市より多きうけりて。未注詩  
由り御ありといひし。

あり事也長安の是名利地

全

前々の市中を歩一人あり。附け長安の名利の地あり。我片家あり。より此と  
のゆゑ。未注古詩。長安古来名利地。空年無令行路難。

一矢のおのきこそ月くるゆへ

人

前日。ちやこあん。附け。よ。い。もの。を。ま。て。救。急。家。を。つ。も。り。よ。り。流。の。や。り。に  
具。中。れ。と。も。大。方。な。い。や。り。の。や。り。を。運。の。ま。さ。い。の。や。り。を。ま。さ。い。

いそがしき師走の空よりまあて

蕉

前日。と。市。中。と。て。附。け。市。中。の。節。季。を。ま。さ。い。中。よ。り。ま。さ。い。ま。さ。い。ま。さ。い。  
い。そ。が。し。き。話。や。く。寺。の。海。を。り。

人

前日。ハ。ソ。が。か。よ。い。ま。さ。い。の。附。け。こ。の。あ。ま。り。を。話。向。を。ま。さ。い。二。句  
互。照。し。て。す。ま。り。ま。さ。い。ま。さ。い。

此甲子古年玄蕃のりをりて

蕉

前日。寺。と。い。ふ。附。け。其。甲。子。ハ。昔。年。の。内。子。古。年。が。ま。さ。い。ま。さ。い。ま。さ。い。  
玄。蕃。の。下。部。の。事。あり。一。年。注。其。り。も。名。の。備。り。て。一。句。の。より。古。年。玄。蕃。の。名。を  
付。へ。前。日。注。法。を。ま。さ。い。前。日。ま。さ。い。一。句。力。あり。

かぬやあまりかぬそくあまやこま

蕉

前日。の。雨。の。あ。け。の。を。附。け。上。筋。の。わ。り。れ。と。つ。け。り。未。注。涼。氏。茶。の。巻。紫。  
上。十。四。才。の。か。ぬ。そ。く。ハ。タ。チ。ヤ。カ。コ。ヒ。ハ。ツ。コ。

うさいまい物まふさるのりて

人

前日。の。上。筋。を。附。け。其。路。を。つ。け。り。未。注。後。朝。の。ま。さ。い。て。尊。徳。や。ぬ。こ  
あ。ま。り。の。物。ま。ふ。さ。る。の。り。て。

物りそくきみ海へ

人

前日。ハ。ソ。の。人。ま。さ。い。つ。け。り。その。用。あり。て。お。城。一。ま。さ。い。の。三。句。の。ま。さ。い。の  
か。ぬ。そ。く。の。物。ま。ふ。さ。る。の。り。て。

前々のすゝめり、いなるは得をとかめ附月、何れものめさぬなり、あはは氏あとの  
左遷あるこの仲ありい今をさるる

月と花は良のさる根を北とて 蕉

前々の丹波まつけり、その母のうら美を踏く、さるる大いさあつて七  
月の月とこゝろ、こゝろ月をまつる

雲を住しつる、こゝろの肌ぬき 人

前々のハルしき、あつてけり、時候のく倫の月まつけり、さつてつる  
ともよ古言柳波行二返りり、あつて

破の戸の灯、うちける春の末 全

前々の肌ぬき、いなるを踏く、あつてけり、さるるあつて

人さるるさしき、麦のじき、さるる 蕉

前々のやう、あつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、  
いさ、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

家あつて、腋ぬきまつむす鏡 人

前々のいさ、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

家あつて、いさ、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

もは思ひぬる、神、つたの物いじ 蕉

前々のか、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

人去て、いさ、法、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

前々の神、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、  
清空とあり、か、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

初瀬、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、 蕉

前々の法座を附り、持、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

日、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、 人

前々の釋、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

垣、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、 蕉

前々の時、馬、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

あや、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、 人

前々の露、さるるあつてけり、さるるあつてけり、さるるあつてけり、

人の真をいふありぬをそくしつと辨くうの無注あやまくに滝くりの詞方言  
ヲハ拵るくくしつと辨くう

何の雲に多のあはたつむら 蕉

前々の夕まのめあぬつたけのつとあはす其時とのあはたアノ雲りつたけ  
解は前々の人それのくくはあはすあはすあはすあはすあはすあはすあはす  
もちんまの流を合ちあはすあはすあはすあはすあはすあはすあはすあはす

行月のくもの空まは清きよ 人

前々の雲あぬつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ  
まらあつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

孤も遠く朝よわたり 蕉

前々の月を眺守しつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ  
見て改更つたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

秋の田をかきぬ公の長い 人

前々の夜通しつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ  
さいあつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

心めく瓦社の木サあや 人

前々の文字を問は行家つたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ  
くすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすく

馳走まら子の敵にけり 蕉

前々のくまやまつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ  
を多つたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

花の頃詠年集もくらやほ 人

前々のつたけを詠りつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

田のつたけをくらやほ 蕉

前々の詠年集もくらやほのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ  
つたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

菊はあはれつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけのつたけ

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の

其角

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

三夜さの月見雲あつり 裁人

三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

集秋の夜子多きについで

全

吹てまきる茶のあま

角

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

吹てまきる茶のあま

全

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の

集きまきる茶のあま

人

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

恨多る涙まあはよとまりて

全

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

静りま前子舞をすめりぬと静の

角

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ

前月のうららむるを所りの頼朝の静の舞をすめりぬと静の  
三夜さの待宵望十六夜あましく眠り天津の静をきて月清光あましく  
いづれ又月の一宮より第の倉今と老たあすういづれ







前々も世の遊しつて附々の豊十をさしつたま

漫頭をうきしりまゆつらみらる

左

こまい世子つけれぬ人つ損

人

前々の世も世もつけれぬ人つ損

西王母東方朔も月うらなひ

左

前々の世も世もつけれぬ人つ損  
もかき世りありは老のも余も丸の秘多し  
あつて今もあつて東方朔と聞しものも名を  
撰ひて今もあつて東方朔と聞しものも名を

や鵲の舌のみ

舟

前々の世も世もつけれぬ人つ損  
をあつて今もあつて東方朔と聞しものも名を

あつて今もあつて東方朔と聞しものも名を

左

ものも世も世もつけれぬ人つ損

良の親も有ればあ

人

前々の世も世もつけれぬ人つ損  
心えて首尾をたしつてあ

やおいひなむねもたつちか

左

あつて今もあつて東方朔と聞しものも名を

角

前々の世も世もつけれぬ人つ損  
こまい世子つけれぬ人つ損

夕鴉宿の長さは夜のみ

左

あつて今もあつて東方朔と聞しものも名を

人

穴つちも座うちまひ草枕

左



前句を添えんとしてつげの喚聲とて此呼聲誘いあひし事やま  
注喚聲又呼聲又呼聲とあり

いづるあふ金すい喚聲のま

全

我もくし新ぼく人の醒やま

山嵐

己れ欲きものを人より守りておくれの本文よりおくれのうぬ  
実情あつたふまへに口大我もくしと又一本の我もくしとあり

秋もみさきしつも湯燥 裁人

根にこの意をくけてあるをさむやのけさむさむおれをあらぬ志の  
まこと湯燥いことあつたことおれなまじくま注酒不解治之以湯

月の扇書をいぢらぬ中おて

全

外面 廿六の草まけり行

電

前句の徳恩のくつげのその人まじくおれまじくおれ人の問より

奴隷あまハソつくといひよま材をよ入るをへたらこ。外面そとも日  
本紀の成務天皇の御巻に皆面ソトモとあることくつげのこまを後世に  
外面と心得ておむいしことこまのたつた人のいふおれそりあり  
もつたし人して外をいとこまをそり外をそりありあり  
は俗にこの注外面が面外野とまじく家の後うこまの挨拶こ

とねあひて牧まけりぬ里のま

全

前句の草をあらり人つげのその人の見ゆる牧の体こえま前句を山野の  
体とてつげのまははそつたものこ

川城 ぬれつ城下のみぢ

前句の野まけり川まけり川を極向を定めて野ま川まけり  
城下とておむいしことこまのたつた人のいふおれそりあり

夜鷹魚の遊とるぬ遊はあま

全

前句の川城まけりつげの其川城しあま人の中より夜鷹あまの山鏡いしを  
ぬれおむいしことこまの注鷹は歴武天皇の天平年中夜鷹の  
新羅は後あまの津泊の折うつたまを醒醐帝後光明帝城あまの前湯こた

唱歌 志まけりるやる

電

前々のいも点の山兜のつれづれその用をすすく

形み多見ると形もくぢりまの雲よ 全

前々の声のうちをひれくるの附々の別世のまやうと形もあつてさへくるあつ

後をいよとつちのまかあけ 人

前々をあぬ別れを見て附々の様ありて志らく離れんまを人をつれく

今物も油あけすま玉あまき 全

前々を一人ものを見てつれづれ一人ものまをさへつれく

行燈をりてかくる浪人 雪

前々をいもかき中を見てつれづれそこを奇食する浪人の妻と食もあつ  
しとて行燈をりてさへくる

着物を礎ようとて 了 晚 全

前々の浪人を附々の浪人の垢と見る着物在家ありてさへつれづれいもさへ  
あつてさへこのつれづれをひれ浪人の自ら仰るやうなれとも浪のこもさへ  
見れりよ

明日の髪をる雪の月影 人

前々の髪をる人の体もれにつれづれを髪をる道もあつてつれづれ

去る雨路の群つ泣居る女客 全

前々の髪をる人を附々の髪をるまをさへて自擧をたもち婦人とてかいつくさ  
去る雨路の群つ泣居る女客

つれづれの送者の後染や 雪

前々を大つよやめる人の女抱くあつてさへつれづれかいつくさあつま  
てつれづれしき事をつくまを流雪散るつれづれも其髪をさかいつくさすとも  
いふもは埃あまを我が家のまをさへつれづれかいつくさすともいふも  
もやんまものまをさへつれづれつれづれ

ちちちの髪をるまをさへつれづれとも長出 人

前々のたのいも人のまをさへつれづれつれづれつれづれ人の長髪をるまをさへつれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

よあつれつれづれつれづれつれづれ 全

前々の日のくれあれにつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ  
つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

初雪やちしとのいなる桐のまよ

野水

春のまよりの桐のまよはまよわの... 疑のやの格あゆを  
も冠のやまを疑ひ... 疑のやの格あゆを  
あゆの疑を... 疑のやの格あゆを

日ゆみめまの冬の朝起 以活梧

数々の初雪の余情を綴り... 疑のやの格あゆを

山川や鶴の喰ものさるるにん

全

服の朝起... 疑のやの格あゆを

賤も遠がふ見まかると

水

前々山川の鶴の喰ものさるるにん... 疑のやの格あゆを

あつたま押合ふ月も草叶つ

全

前々の遠く... 疑のやの格あゆを

あふこま長棹の秋

梧

年注押合ふ月... 疑のやの格あゆを

川裁のまよも秋の雨

水

前々のまよ... 疑のやの格あゆを

わろく痛からる秋のまよも

梧

前々の人まの人... 疑のやの格あゆを

まろくをわろくからる秋の下

水









て行かんとあつた。余は注さきくさし、檢と正木ハ割あしして人より目の通る  
たろをまきとしよ紙匂のさきくさし、葛の枝葉を草にと又引と根コキ  
まきあつた又さきくさの事種とあつたこの處ハむへもるくさきくさのさき  
よつとよふあつた

肩さぬをりき酒子よふ人 長虹

前々の業のしきかきくつけりそのうらうらして酒を沈酒するものをつけて  
世るの是非ソかんをまきくさるる

夕月の入きも早き、塘きも 鼠彈

前々の餅程をつけり酒をうてくれさる時刻をつけり

多りり子鯉もつてこ秋 一井

前々の物を見てつけりその用をつけりさきくさ前々のうれさるをまきくさの鯉  
あれいしまつてかくれさるを見てつけりさきくさ

里涼く踊者よ二三日 長虹

前々の大津の浦の秋を見て附りその甲のよきうらうら

宮司り妻よゆめさきくさ 胡及

前々のさきくさへる人のさきくさをつけりさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
くさへる城下よりさきくさへるものさきくさの田家へ行いさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
家の妻さきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

前りぬも流もさきくさ 一井

前々のさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

高き新とさきくさ切りさきくさ 鼠彈

前々の吏のさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
つけりさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

前りさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
さきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

前りゆくお出の城の雪鋤 長虹

前々の人家の用を附りさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
さきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

前り書りさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
さきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

前々の大空をすさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる  
さきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへるさきくさへる

前々のてをり合ていふち笑いしつを附けいせむとていふ  
蛇とつりしむね女中あり 一井

前々の蛇とつりしつを附けいその場のしききつてけり〇年注子曰く此三句  
浦風子経吹まくる月源一 長虹  
源氏の巻をわけてありし

前々の浦風ふり添へしつを附けい〇年注子曰く此三句  
みりもかゝる来紀伊国境屋 胡及  
尊即濱中村長保寺天台宗寺蹟二百石紀州家の善徳寺頼宣公の御境屋あり

前々の場まつけり〇その用あり〇年注寛文七年のころ紀州の太守家土土人  
若者のたし矢射はる花の陰 一井  
余しそ十射をさししむ

前々の花のけりまつけり〇その中より蕪くいざ一人のけりしとてとて例の  
一掃ありたむをいふとていふ  
かゝるのしきありきくも睡るふん 胡及

前々の遠はるかゝるを執中しを附けいありしとていふ

前々のくがしをえんをてつてけり老人をいふ  
親子の錦の裾を落つ 長虹

前々の老人をてつてけり〇奇きいぬをてつてけり  
おろしきる内もさいしを洗い 鼠澤

前々の事まつてつてけり〇その中よりちの人のありし  
吹まあるある物をもつてけり 一井

前々の事まつてつてけり〇其きしきのをいふ  
木をてつてみよあるるを割松枝 長虹

前々のをひらきなをてつてけり〇若ものとももの無まつてけり〇年注行北城  
秤あがる人の真 胡及  
りハ斤両といふ又千キリ杜秤畧千キともいふ

前々のを其傳よりけて附けい其若ものの中より一人の老人をいふありし  
け年まつて後のあるるをけり 一井  
百五九

まくもまきなついで入る月 鼠弾

前々の人の無我ちうれほろれに附たりしよそのかもしつけれり

美るるこそ音千子の陰のうそまき 胡及

前々の月のまきあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり  
りまきをこころい月をわらふまきも括あ

こまきあるまき志のむ秋のも 長虹

前々のまきこころまきあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

市有投入道のまきあけは 鼠弾

前々のさいしき場ちうまよしつたけ入るまきあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり  
まきあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

衣川あがる人の足音 一井

前々の娘宮のあがりまきあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

毒あさへて此一まきれも喰あへて 長虹

前々まきものあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

片風あがるこころ白雨 胡及

前々の人倫まきあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

板あさへて端あさへて 一井

前々の又雨あさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

まきあさへて此一まきれも喰あへて 長虹

前々の庭り内とこあさ附り其あさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

ぬりぬり日あさへて其あさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

前々の鶺鴒のあさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

足まきあさへて其あさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

前々の花あさへて其あさへて其時刻をつたへて前々の月を志するまきへり

異本上のつぎ

元録壬申冬許六亭與行

ふるもかへんをきしよも初しき

さき

野は仕付しる麦のおぼ土

許六

油実をくらん小粒を吟味し

洒堂

汁のよきあり秋の風を肌

心水

宿の月を妻へ入る古き

嵐蘭

先ユ吏たる蚊屋の鉤やう

筆

才より好信染中よ悔まぬて

水

焼焦しをきく妻もみぢす

水

粽つむ笹の多き色は明きあり

六堂

輓磔をたるる奈ふれ入口

六堂

はかハ鏡いぬ人もうちまじり

六堂

船道のけりて蜻のくい胞き

六堂

雪圍をあらふる神の宮遷し

六堂

北より秋の風をよきいへ

六堂

八月ハ旅面あき小股子

六堂

焼山古えの雲のあをき

六堂

おおすり白も花の本かけは

六堂

はぐものかゝ鶴の卵も

六堂

春深く陰者の留をぬつりしや  
 當麻の無き酒を破する  
 十のともを輕一の年久のて  
 夜着たてぬく長持のこへ  
 灯の影めづしき甲侍  
 山のさきす山ももる夢  
 見逢ふも鮎も志を境ゆきし  
 屍月あがりよ翠屏の女房  
 此のやふ恋も志のなまじき雲  
 琵琶世をたへて出るかろ物  
 六 堂 蘭 水 翁  
 六 堂 蘭 水 翁

有明ハ昆沙堂坊小方丈  
 舌のまひぬ孤や、寒  
 一寸も青き葉の翠しは清原  
 一條あつらふる管根跡の坂  
 宗長のこき寸白も草の跡  
 茶麻たたくぬむ百性の家  
 花の春まうへて廻る神楽  
 七十の賀のソ若菜共多の  
 六 堂 蘭 水 翁  
 六 堂 蘭 水 翁

大木、  
 實政七年乙丑春三月丙刻皇初書林  
 竹岡井社兵衛  
 中川藤四郎  
 野田治兵衛  
 持 行

そ浪。それより河漢あふりて和文のまゝめりかかるといふは  
法の中あきし日ハ哥のあふりてあり格このひまゝかかるといふは  
法の中あきし日ハ法を犯しものふ  
まゝくこと一法を犯しものふ  
をまゝあて  
千金の浪ハ崑山の玉の如くはるるに金玉の對あり  
崑山の玉  
を崑山ハ鐵圍山雪山並ニ全シ廣十万里高十万一千里西王母穴處ニ  
万物尽ク有り佛家ニ所謂須弥君山是ニ事ハ山海經代醉ナトアリ  
月もあふりてはるるのふりぬれのいきこをあらえて天山のた  
うらうと  
靈鷲山ハ春園窟負重山普賢山仙人山鷲臺山鷲峯並ニ全シ  
天竺摩竭陀國アリ西域記アリ崑山ト天山ト對句あり  
も阿ふりて我秋津洲のくまづつとあふりぬのよま  
あまうをいそましてよふり川のさかひはいぬれうまはな  
りぬれぬをのへいぬれぬあふりぬれぬはこまよそのふりぬれぬ  
とをあらうあふりぬれぬをあらふことハいそまのぬれぬあふりぬれぬ

世は枝の雪をあらふまゝとの雪をむつひぬる人も河海  
席は但願徳院ホ三世の孫四世の左大臣善成公の作こよ曰くもとより意の雪を  
あつひぬれぬの雪をあらふまゝといひ浅く見察くまゝなるあふりぬれぬをむつひぬれぬと  
云こよといふあふりぬれぬの格あり侍りまゝすて神木のすゑ  
のよまあてあふりぬれぬまゝもかか何りしのぬれぬ  
かしのいづつめづらつめハ即女とめハ翁の對あり万葉表別記ヨイラ  
女の事ハ但氏の下まめハハイラツメとよむ也  
の名の下ハありハラトメとよむ以上見るまゝ  
草と  
まゝいづつめづらつめハ即女とめハ翁の對あり万葉表別記ヨイラ  
よまいづつめづらつめハ即女とめハ翁の對あり万葉表別記ヨイラ  
そあ川の川がふりぬれぬまゝすてぬれぬ人ハこぬれぬの  
いづつめづらつめのもの書あけるあふりぬれぬのまゝをいづつめづらつめ  
とあふりぬれぬやまゝくそのおく儀をあらふぬれぬ



世子行ふも此ありしものまじしものありふりあり

### 大鵬館主人より

安んじけく永き

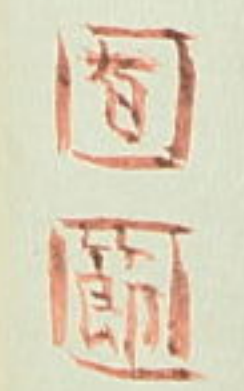
三つのと

### 長月の頃

七部大鏡序之内  
ソノ中永のそめ市谷の書肆曾尚堂より誹諧七部集を一書に書くはよ  
とをふまふよ久の日の短く春の日の長月を羨張の口とくいしこのつる長  
く書くありぬこをみすめる志ありしめる何れとくする家この七部  
集の注釈をつらしてすすめつるのあゆみとこいしするものありのりり  
予り一言をぬきあはれあり書くありぬ文政二のころに五月  
七十一部大鵬館主人

天保十二年歲次辛丑三月

千載茶井鶴士能 有節書



### 文法

序文

發端

發語

起語

結語

返辭

決辭

釘辭

歎辭

括辭

語路

助語

押字

抱字

句鎖

枕詞

句拍子

辭

本末

句讀

長短

語路

斷續

句格

影畧互見

結前生後

錯綜顛倒

棄胎換骨

無心所着

上中下畧

雲土夢

長短

月

蟋蟀

鳥嵐

互照

倒裝

藏頭

藏尾

雙関

首尾

文對

意對

句對

字對

隔對

隔句

疊語

疊字

變態

本注

頓挫

幽玄

隱見

場用

自他

不易

流行

○文法

一篇

法式

句格

一句

拾例

○棄胎換骨

古人

文章

報

借

意

各別

ナル

○雲土夢

不連續

語

分

テ

又

模

様

附

面白

ト

云

ヲ

月

ハ

面

工

花

ハ

白

シ

ト

云

ハ

ニ

カ

如

シ

書

經

ヲ

出

タル

文

格

ナリ

○蟋蟀トハ先ニ云ヘキ又ヲ後ニ具名ヲ顯ハセルノ詩經ノ七月  
ニ於格アリ  
○身鼻ハ蝙蝠ニシテモノ、何方ヘモ紛ル、  
○雙又ハ一物ヲ以テ上下ノ働アルヲナリ

題

歌 氷川詩式、永言謂之歌亦曰放情曰歌也歌行、相似也

箴 詩經ノ註、以磯刺病也鏡曰抗前之失也

詩 詩經ノ序、人心ノ感物而形言之餘也執名詩者之也

論 文式、論、直、曲折深遠也或曰反覆、盡其情也又相對スルモ

賦 陸機文賦、物瀏亮ナリ李註、象、變、明白ナリ又當前ノモノヲ

解 文心雕龍、解、執也莊子、有、用、刀、牛、字、義、也、又、一、物、ノ、理

行 詩人玉屑、休如ニ行書曰、行文選、善義、行、曲、也

傳 韻會、史氏紀載、夏跡ヲ以傳于世或曰託具、姓名也又人ノ

吟 文選、註、吟、猶、詠、也詩人玉屑、悲如、嗚、呼、曰、吟、也

記 說文、謂、一、々、分別、記、之、也盧曰、以備、不忘、也又往古ノ起リ

曲 詩人玉屑、每曲、盡、情、曰、曲、或、古、有、大、堤、ノ、曲、也

辨 說文、罪人相與詔也文式、直方折明白也又實有、理、ヲ、以、テ

引 文休明辨、大畧如序、而稍、爲、短、簡、蓋、序、濫、歸、也

說 文ノ賦、註、曰、辭、口、之、詞、明、前、夏、虛、誑、感、心、也、又、虛、誑、ノ、理

謠 詩人玉屑、通、字、釋、俗、曰、謠、或、曰、民間、諷、詞、也

頌 朱子詩傳、頌、宗廟、樂、之、美、盛、德、之、形容、也

辭 古文辭式、寄情深、而語緩、或、設文、此、今、詞也

贊 字彙、佐也明也文選、有傳贊或、曰論贊也

銘 札記註、警戒之辭、曰銘也、銘名、許銘其功也

表 文選李註、表明也、標也、如物之標、或曰驗、政、曰表、陳

教令 蔡邕、力、獨、斷、諸侯、言、曰、教、彙、訓、授、也、亦、曰、令、

書狀 韻會、書、字、其、言、如、其、意、彙、狀、猶、言、無、形、狀、

序跋 說文、序、東西、墻、也、廬、曰、次、方、語、之、彙、跋、是、私、曰

對問 說文、對、應、無、方、也、或、曰、寸、寸、法、度、也、韻、會、引、

日記 說文、日、記、變、也、紀、與、記、同、私、曰、日記、二字、亦、朝、

碑文 說文、碑、石、紀、功德、祭、義、運、載、道、用、木、也

弔文 文選、為、弔、祭、類、也、弔、問、義、私、曰、可、言、以、書、而、訪、問、

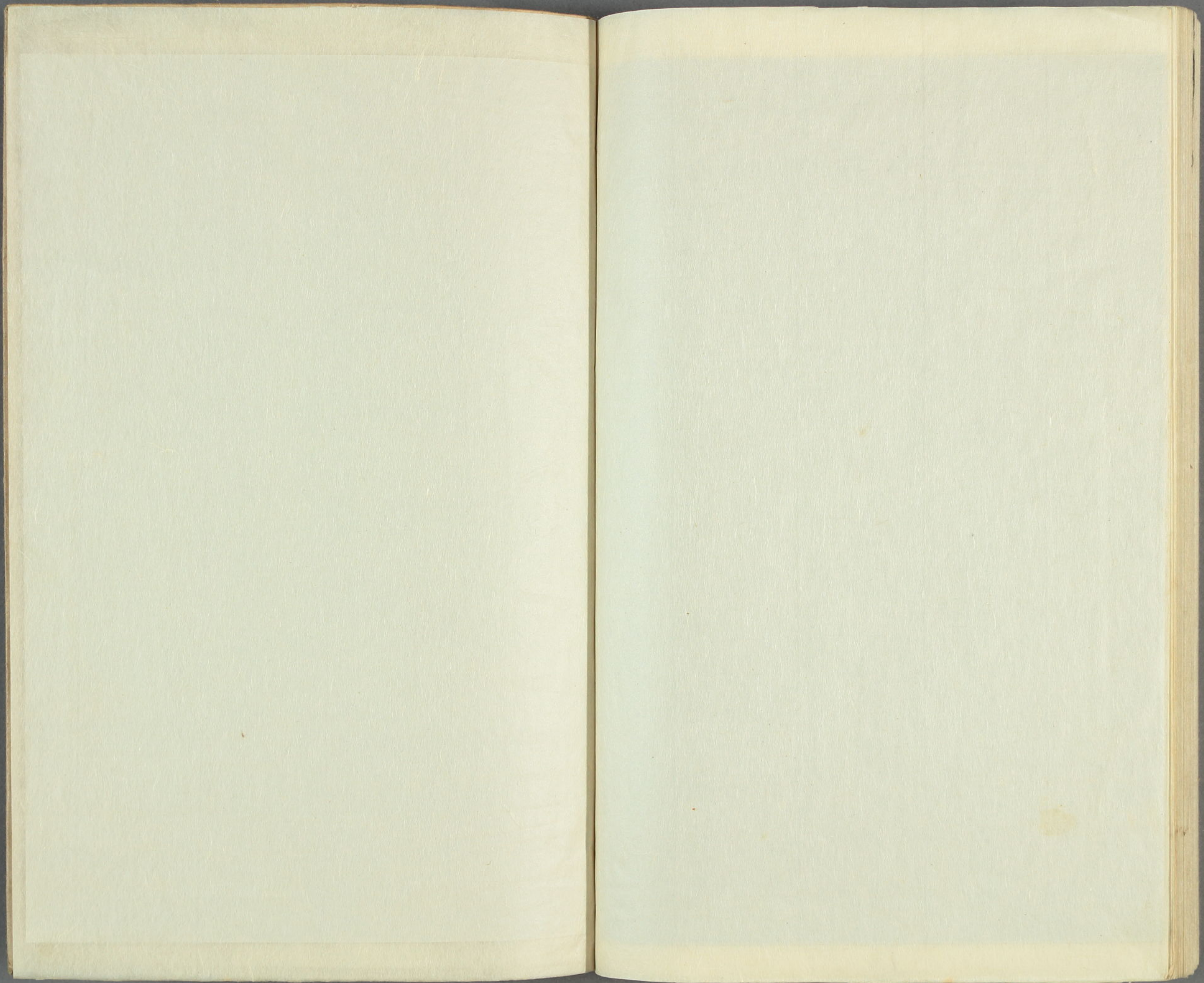
總計十七

鶴屋右節先生此撰錄、以、至、六、十、一、年

幹支一巡、了、弔、清、誌、之、錄、也

明治癸丑四年辛丑十二月

栖鶴舍高松其羅生寫書



Handwritten text on a lined page, including the word "Index" written vertically on the left side. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. Some legible fragments include "Index" and "of the".

A blank, aged page with some minor discoloration and faint bleed-through from the reverse side. There is no legible text on this page.

